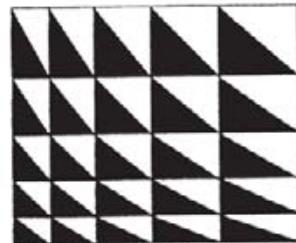


# モノグラフ・高校生'83

## vol.9 高校生活の意味

©1983(株)福武書店 教育研究所／加藤智福・賀川雅子・遠藤純子  
放送大学教授 深谷昌志・私立城北高校教諭 石崎廣義  
東京都立八王子高校教諭 仁平正男・東京都立武藏高校教諭 藤生真沙雄  
東京都立荻窪高校教諭 尾澤弘臣



### 目次

はじめに	2	第III章 高校生活の期待と現実	31
教育機関としての学校	4	1 入学前の期待	31
テーマ設定	4	2 入学後の変化	34
サンプル構成	5	3 学校に対する誇り	37
第I章 生徒の自己像	6	第IV章 高校生活と特別活動	41
1 学業成績の推移	6	1 高校生にとって特別活動とは	41
2 現実の自己像	9	2 ホームルームと生徒会活動	43
3 理想の将来像	12	3 部活動	47
4 卒業後の進路選択	15	4 学校行事	48
5 将来入社したい会社	17	5 校則・きまり	50
第II章 高校生にとっての授業	19	まとめに代えて	54
1 授業を受ける気持ち	19	資料I 調査票見本・集計表	56
2 ノートのとり方	21		
3 生徒の望む授業	23		
4 教科ごとの重み	23		
5 教科の有用性	26		
6 高校生活の充足感	28		



## はじめに●

モノグラフ高校生シリーズでは、若手の研究者と高校のベテラン教師とが共同研究をする形で、調査票の作成を行ってきた。サブ・グループに分かれて、細かな打ち合わせを重ねると同時に、毎月一回程度の全体会に、その結果を持ち寄り、調査のデザインを決めたり、調査票をつめたりする作業を行っている。

もちろん、テーマによっては、若手の研究者が中心となり、ベテランの教師たちのアドバイスを受けつつ調査を実施することもあるし、それとは反対に、教師たちの問題意識から出発し、それを若手の研究者が技術的に手直しをして、調査にこぎつける場合もある。

本調査は、後者のタイプで、テーマの設定は、学校教育に対する教師たちの反省に基づいている。自分なりには、授業に力を注いでいるつもりだが、生徒たちが、いまひとつ乗り気でない。ホームルームを大事にしているが、生徒たちがしらけている。入試にからむ勉強には力を入れるが、そうでない教科は手を抜くなどが話題になった。

休み時間になると、活気を取り戻す生徒たちが、授業中はぼんやりしている。そうした生徒を見ていると、異邦人に思えることがある。生徒たちが何を考えているのかわからなくなったり、初心へ戻ったつもりで、生徒たちの学校に対する気持ちを尋ねてみたい…等々。

こうした話し合いの結果、巻末に付したような調査票が作成された。正直に言って、大学の研究者の作った調査票とは色彩が異なり、何となく泥くさい感じがする。しかし、先生たちに代わって言わせていただくな、こうした泥くささが、教育実践を支えるものなのであろう。

分析にあたっても、先生たちに執筆を依頼した。学年末の忙しさに、慣れないデータの山が加わり、先生たちには酷な日程での作業を強いることになった。先生たちの力を多としたい。なお、調査票の作成にあたり、特に同人の武藏大学・武内清教授及び千葉大学・明石要一助教授から貴重なアドバイスを受けたことを感謝したいと思う。

ラン  
ア・  
ヨー  
ウた

くテ  
るる  
告手  
る。  
トる  
いで  
ムル  
らむ  
にな

しや  
バあ  
そつ  
ぎ々。  
され  
なり、  
させ  
の  
。さ  
作業  
を票  
く、  
いと

### 調査の企画

#### 高校教育研究会

代表 深谷 昌志（放送大学教授）  
武内 清（武藏大学教授）  
明石 要一（千葉大学助教授）  
石崎 廣義（私立城北高校教諭）  
仁平 正男（東京都立八王子高校教諭）  
蒲生真紗雄（東京都立武藏高校教諭）  
尾澤 弘恒（東京都立荻窪高校教諭）  
穂坂 明徳（神奈川県立平安高校教諭）  
耳塚 寛明（東京大学助手）  
樋田大二郎（東京大学大学院）  
苅谷 剛彦（東京大学大学院）  
吉本 圭一（東京大学大学院）  
田中 雅文（三井情報開発研究員）

#### 本書の執筆分担

石崎 廣義 I章  
尾澤 弘恒 II章  
仁平 正男 III章  
蒲生真紗雄 IV章  
深谷 昌志 全体の総括

## 教育機関としての学校●

### 1. テーマ設定

中学生や高校生を対象とした調査を重ねていると、学校が、教育機関として機能しているかどうか、疑問に感じることが多い。

具体例を挙げるなら、モノグラフ vol. 3「高校間格差」の中に、次のようなデータが示されている。

#### 高校生活の中での楽しさ

とても+かなり=楽しい

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| ①友と話している時  | 29% + 30% = 59% |
| ②部活動       | 13% + 19% = 32% |
| ③先生との関係    | 2% + 2% = 4%    |
| ④授業を聞いている時 | 1% + 2% = 3%    |

友だちと話している時が楽しいというのはわかる。しかし、授業を聞いている時の楽しさが、3%というのは、あまりにも低い数値である。

もっとも、こうした結果をふまえて、授業についての気持ちを「楽しい」という用語で尋

ねるのは妥当性を欠くとの指摘も成り立ち得よう。そこで、別の機会に、「自分らしさを發揮していると思いますか」の形で、生徒たちの気持ちを尋ねてみた。しかし、この場合も、

とても+かなり=自分らしさを發揮している

- |          |                 |
|----------|-----------------|
| ①友とのふれ合い | 41% + 26% = 67% |
|----------|-----------------|

- |      |                 |
|------|-----------------|
| ②部活動 | 18% + 21% = 39% |
|------|-----------------|

- |            |              |
|------------|--------------|
| ③授業を聞いている時 | 3% + 6% = 9% |
|------------|--------------|

の通りで、数値に多少の散らばりは認められるものの、基本的な傾向は一致していた。つまり、どのような用語を使ったとしても、図式化してとらえると、

学校生活=苦役としての授業+

友と過ごせる楽しい時間

のような関係が成り立っているらしい。

そこで問題となるのは、教育機関としての学校の守備範囲が、前者に限られているのか、それとも、後者を含めるのかであろう。そし

て、仮に前者だけが、学校だとするなら、学校は、苦役を強いる牢獄のようになってしまふ。そうかと言って、後者を重視しすぎると、学校はレジャーランド化してくる。

したがって、前者と後者とが加わったところが学校であり、さらに言うなら、後者は、生徒に充足感を与え、そして、前者は、知識や技術を伝達する機能であり、いずれもが、学校生活を成り立たせている条件なのである。

もっとも、こうした分類は、図式化されすぎており、授業を通してでも充足感を与えるのは十分に可能であろうし、友だちとのふれ合いや部活動なども、単なる充足感を得る場でなく、教育的な機能を担った指導の対象で

あり得る。

したがって、厳格な言い方を心掛けるなら、教師集団がリーダーシップをとって、生徒を指導していく領域と、生徒が、教師と相対的に独立して、自主性を發揮していく場とに、学校生活が二分されるのかもしれない。

そして、従来の学校論では、当然のことながら、生徒を指導の対象とみなす立場が優先して、充足感を与える場的な視野が欠落しがちであった。そのため、学校が生徒たちにとつて、充足感を味わえる場でなくなりつつある。

そこで、本調査では、学校生活が、生徒にとってどんな意味を持つのかを、授業や部活動、学校行事などの諸側面から分析することにした。

## 2. サンプル構成

調査対象は、いずれも普通高校で、計14校。構成は別表に示した通り、私立5校を含めた

14校の高校生3536名。

調査は、昭和57年11月に実施された。

サンプル構成

学年 学 校				計	(人)	対象・東京都 公立4校 私立4校 青森県 公立2校 私立1校 岡山県 公立3校
	1 年	2 年	3 年			
公 立(9校)	761	760	745	2,266		
私立・男子校(3校)	261	271	252	784		時期・昭和57年11月
私立・女子校(2校)	199	189	98	486		方法・学校通しによる質問紙調査
計	1,221	1,220	1,095	3,536		

えて  
績が  
すれ  
化に  
成績  
した  
中で  
い生  
そ  
I  
一  
てい  
ま  
面白  
はC  
割合  
と現  
時代  
で現  
クク  
て、  
ラン  
校に  
代ト  
クテ  
をと

# 第Ⅰ章 生徒の自己像



## 1. 学業成績の推移

ここでは生徒の自己像を、学業成績の推移、現実と理想像(将来像)、及び進路選択の観点から考察してみたい。

まず図Ⅰ-1に学業成績についての過去(小・中学校時代)から現在へ至る自己評価の推移を示した。普通科に進学した生徒の約半数、つまり51%は小学生の頃、クラスのトップクラス(クラスで4~5番以内、あるいは上位10%以内)にあり、中学生の頃でも約4割はトップクラスを占めていたことがわかる。またクラスで10番ぐらいまでの上位グループにいた生徒を含めると、上位層の占める割合は小学校時代66%、中学校時代63%と6割を超える。したがって、小・中学校時代の成績が「中の下以下」で、普通科へ進学できた者

は約1割にすぎないことになる。この数値は全日制の普通科に進学するためには、小・中学校時代に上位グループに入っている必要があることを暗示している。

なお、こうした学業成績の推移を、高校のランク別に集計してみると、表Ⅰ-1のように、小学校時代にトップクラスだった生徒はAランク71%、Bランク41%、Cランク33%、中学校時代Aランク56%、Bランク35%、Cランク26%とAランクの高校へ入学した生徒が小学校の頃から、良くできる子どもだったのがわかる。

しかし、小・中学校時代には、成績に対して自信を持っていた生徒も、現在の成績については、かなり厳しい評価を下している。考

えてみれば当然のこと、小・中学校時代成績が上位だと思っていた生徒も、高校に入学すれば、それぞれの学校の中での成績の序列化に組み込まれる。したがって中位や下位の成績をとる生徒も生まれてくる。そしてこうした栄光に包まれた過去の成績と層化された中での現在の成績とのギャップに、半数に近い生徒が困惑している状況が浮かんでくる。

そこで、成績の持つ意味を探るために表I-1を手がかりとして、生徒の心の内を見していくことにしたい。

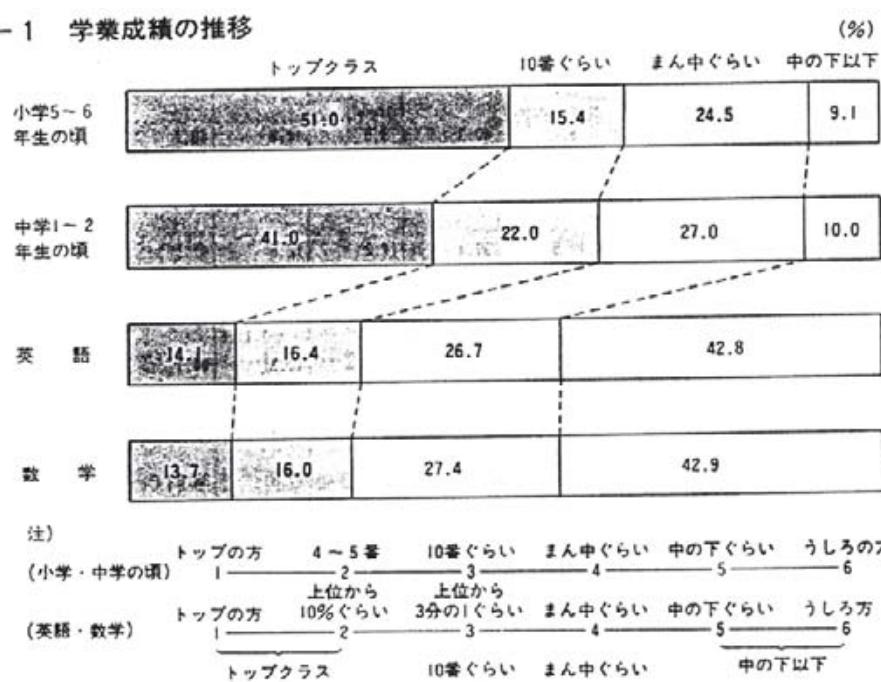
まず、学校ランクとの関係を見てみると、面白いことに現在の成績に対する自己評価ではCランクの生徒の中にトップクラスと思う割合が最も高い。そこで、小学校時代の成績と現在の成績との落差を見るために、小学校時代にトップ層(英語)の占める割合をもとにして現在のトップ層の比率を算出すると、Aランクの場合 $13.7 \div 70.7 = 0.19$ となる。同様にして、Bランク0.22、Cランク0.53となり、Cランクの方が、落差が少ない。Aランクの高校に進学した生徒にとっては、小・中学校時代トップクラスにいた友だちが多いだけに、クラス内で小・中学校時代と同じような成績をとるのが難しいのであろう。それに比べて

Cランクの高校に進学した生徒の中には、小・中学校時代の成績がまん中ぐらいい生徒(小学校の頃34%、中学校の頃39%)が多い。それだけに、Cランクの場合、本人が努力をすれば成績の上昇が可能となる。つまりAランクに進学した生徒よりもCランクに進学した生徒の方が、クラス内の成績に限って言えば、小・中学校時代との落差は小さくてすむ。したがって、Aランクを目指すことだけが生徒にとって幸せとは言えないよう思える。

次に部活動との関係を見てみよう。過去の成績についてはあまり差はみられない。しかし、現在の成績となると「運動部に入り、熱心に参加している」生徒は、トップクラス層の場合、英語12%、数学11%と、平均より低い数値を示している。それに比べて、部活動に「参加したことない」生徒の中でトップクラスの層は英語21%、数学19%と2割前後に達する。これは部活動への参加と上位の成績との両立の難しさを表していると言えよう。

充足感については、現在の高校生活に「とても」「かなり」充足している生徒の中で、成績上位層の占める割合は過去も現在も平均より高いのに対して、「あまり」「ぜんぜん」充足

図I-1 学業成績の推移



していない生徒の中では、中の下以下の占める割合が平均より高い。学校生活に充足感を持てるか否かの背景には、このように成績への自信の有無が大きく左右しているのであろう。

最後に、現在通学している高校がはじめから入学したいと思っていた学校かどうかを見ると、「ぜひ」「やや」入学したかった学校のよ

うに、志望校に入学できた生徒は、過去の成績評価は高いが、現在の成績となると平均値以下となる。それに比べて、「やや」「全く」入学しなくなかった学校と答えた生徒、つまり不本意ながら入学した者の現在の成績は平均値以上である。つまり志望校に入った生徒の成績は、多くの場合その学校の平均よりやや下位になるので、首尾よく合格したとしても

表 I-1 学業成績×学校ランク・部活動・充足感・入学したい高校だったか  
(%)

項目	尺度	小学		中学		現在の成績			
		5~6年生の頃		1~2年生の頃		英語		数学	
		トップクラス(51.1)	中の下以下(9.1)	トップクラス(41.0)	中の下以下(10.0)	トップクラス(14.1)	中の下以下(42.8)	トップクラス(13.7)	中の下以下(42.9)
ランク別	A	70.7	4.7	56.2	10.3	13.7	44.9	12.9	42.1
	B	41.0	10.0	34.8	6.3	9.0	45.2	11.0	47.4
	C	33.4	13.9	25.9	11.8	17.6	38.7	16.4	41.1
部活動	熱心に参加している	運動部 53.6 文化部 52.5	9.3 8.1	41.7 40.3	11.2 10.8	11.8 14.3	45.1 41.2	11.4 15.8	43.7 38.2
	やや熱心でない、四方に入れて適当に活動している	46.8	10.2	36.0	10.2	11.4	46.1	11.2	45.6
	以前参加していたが現在は参加していない	50.0	7.4	45.3	6.5 ~~~	14.1	43.6	14.4	43.5
充足感	参加したことはない	45.6	13.2	42.2	8.4	21.0	35.3	18.9	42.9
	とても・かなり充足している	59.9	7.3 ~~~	43.8	10.4	17.0	38.1	15.6	37.4 ~~~
	やや充足している	52.1	8.1	40.3	9.5	14.6	40.7	14.8	39.2
入学したい高校たつたか	やや充足していない	48.0	8.6	40.7	7.7	11.8	43.6	12.7	45.5
	あまり・ぜんぜん充足していない	45.6	11.5	39.4	11.2	12.6	47.5	11.9	49.0
	ぜひ入学したかった	58.1	7.7	45.3 44.0	8.5	12.8 11.6	42.8	11.1 10.6	43.1
	やや入学したかった	52.8	7.8	42.2	8.2	10.3 ~~~	44.1	10.0 ~~~	43.7
	どちらともいえない	43.5 ~~~	9.9	30.8 ~~~	15.2	11.0	48.9	11.5	47.7
	やや入学したくなかった	49.5 48.7	8.5	40.8 41.3	6.8	17.3 19.1	36.0 40.1	18.4 20.7	39.0 39.8
	全く入学したくなかった	47.9	11.5	41.7	10.6	20.8			

注) ○ 学校ランク別を除く項目中の最高値の目立つもの

~~~~~ // の最低値の目立つもの

( ) 内は平均

入学後学校内の成績が下がる。それに対して不本意ながら入学した生徒は、1ランク上の学校をねらい、そちらは落ちたかあるいは、最初からランクを下げて受験したかのいずれかが多いのではないだろうか。したがって、かれらの実力はその学校の平均より上に位置する場合が多いのであろう。

ところで、ここで問題なのは「どちらとも

いえない」と答えた生徒の存在である。かれらの場合、小・中学校時代にトップクラスを占める割合は最も低く、逆に現在の成績が中の下以下の占める割合が最も高い。宙ぶらりんの目立たないタイプにこうした傾向が多いよう思うが、成績面だけでなく今後十分注目していかなければならない生徒像ではないだろうか。

## 2. 現実の自己像

生徒たちは高校生としての自己の現実像をどのように捉えているのだろうか。性格、勉強や運動の能力、スタイルや容貌などに関する13の項目を基に、それを探ってみたのが図I-2である。

ここでは「少し」「とても」そう思う割合を自己に対する肯定率の高い順に並べてある。一見して男女ともに自己評価の低いことがわかる。生徒たちが自信持てる項目は

- ①友だちが多い.....58%
  - ②苦しいこともがまんできる.....56%
  - ③心がやさしい.....55%
- の3項目のみに限られている。そしてその他他の項目について自信のない生徒が圧倒的に多い。特に、
- ⑫顔がいい.....13%
  - ⑬異性に人気がある.....13%

などは約1割の肯定率にすぎない。

また男女差の大きな項目についてみると、  
⑤運動神経がいい .....1.6倍  
⑥将来、大物になりそう .....2.6倍  
⑩勉強がよくできる .....2.0倍  
⑫顔がいい .....2.1倍  
⑬異性に人気がある .....2.1倍  
というように、男子の肯定率の方がかなり高い。一方、

①友だちが多い、②苦しいこともがまんできる、⑥努力型、⑦みんなから信頼されているといった項目は、1.1~1.2倍とやや女子の

方が高い。つまり友人関係やがまん強さ、そして努力する態度などの内面的、あるいは内向的な面については女子の肯定率が高いが、それとは逆に運動神経や容貌や異性とのかかわりなどの外面的、あるいは外向的な面については男子の肯定率がかなりの高さを示している。

さらに全項目の男女肯定率の平均は、

男子 33% 女子 28%

と女子の方が全般的には低い。特に、将来大物になれるか否かという問い合わせに対する男女差は、前述の通り2.6倍と13項目中最大の差となっている。女子の将来像は、後述するように平凡で安定した生活を志向しており(表I-2参照)、男子に比べて、女の子だからという理由で、社会的な達成を断念している割合が多い。

ところでこうした自己評価の分析はすでに中学生に対しても試みられている(『モノグラフ・中学生の世界 vol. 12 中学生の自己像ースモール・イズ・ビューティフル』)。その結果と比較すると肯定率の順序付けや自信のなさがはっきり目立つという点では、中学生の自己像と高校生の自己像とに大きな開きは認められなかった。ただ肯定率の低くなる⑩~⑬の項目については、男女差が、

中学生 高校生

- ⑩勉強がよくできる .....1.7倍→2.0倍
- ⑪リーダー的な存在 .....1.1倍→1.4倍
- ⑫顔がいい .....1.6倍→2.1倍

⑬異性に人気がある……………1.4倍→2.1倍のように中学校時代より高校時代になるにつれてはっきりしてくる。

また「友だちが多い」という項目以外の肯定率は高校生の方が高くなっている。つまり、男女の肯定率の平均は、

|    | 中学生 | 高校生   |      |
|----|-----|-------|------|
| 男子 | 30% | → 33% | 差 3% |
| 女子 | 25% | → 28% | 差 3% |

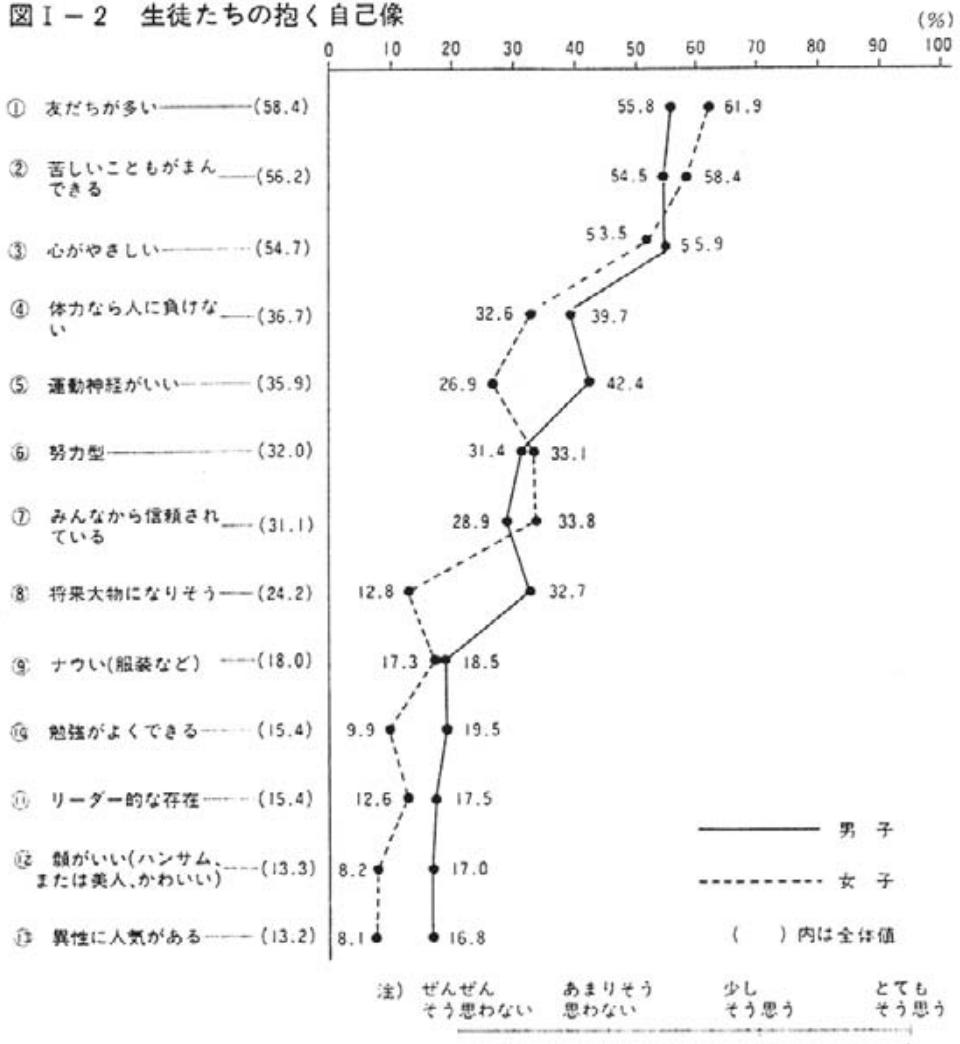
と、わずかではあるが高校生の方が高くなっている。やはり高校へ進学できたという自信が肯定率の高さとなって表れたのであろうか。もっとも本サンプルは普通高校の生徒たちで中学校時代、中位以上の成績をとっていた者が多いから、職業高校の生徒たちの反応を含

めないと、ここから単純に高校生になると自己像が明るさを増すとは言い難い気がする。

次に、図I-3で生徒たちの抱く自己像の背景をクロス集計を通じて、さらに検討を加えたい。図は生徒たちの抱く自己像のうち5割以上の肯定率を出した3つと、最も肯定率の低かった3つについて、「少し」「とても」そういう思うを加えた数値をグラフにしたものである。

学校ランク別は、多くの場合C>A>Bという順に、肯定率が推移する。つまり、学校ランクとしては高いA・Bランクの高校の生徒の方が自己に対して否定的なのである。それに比べて予想以上にCランクの高校の生徒たちの肯定率は高い。

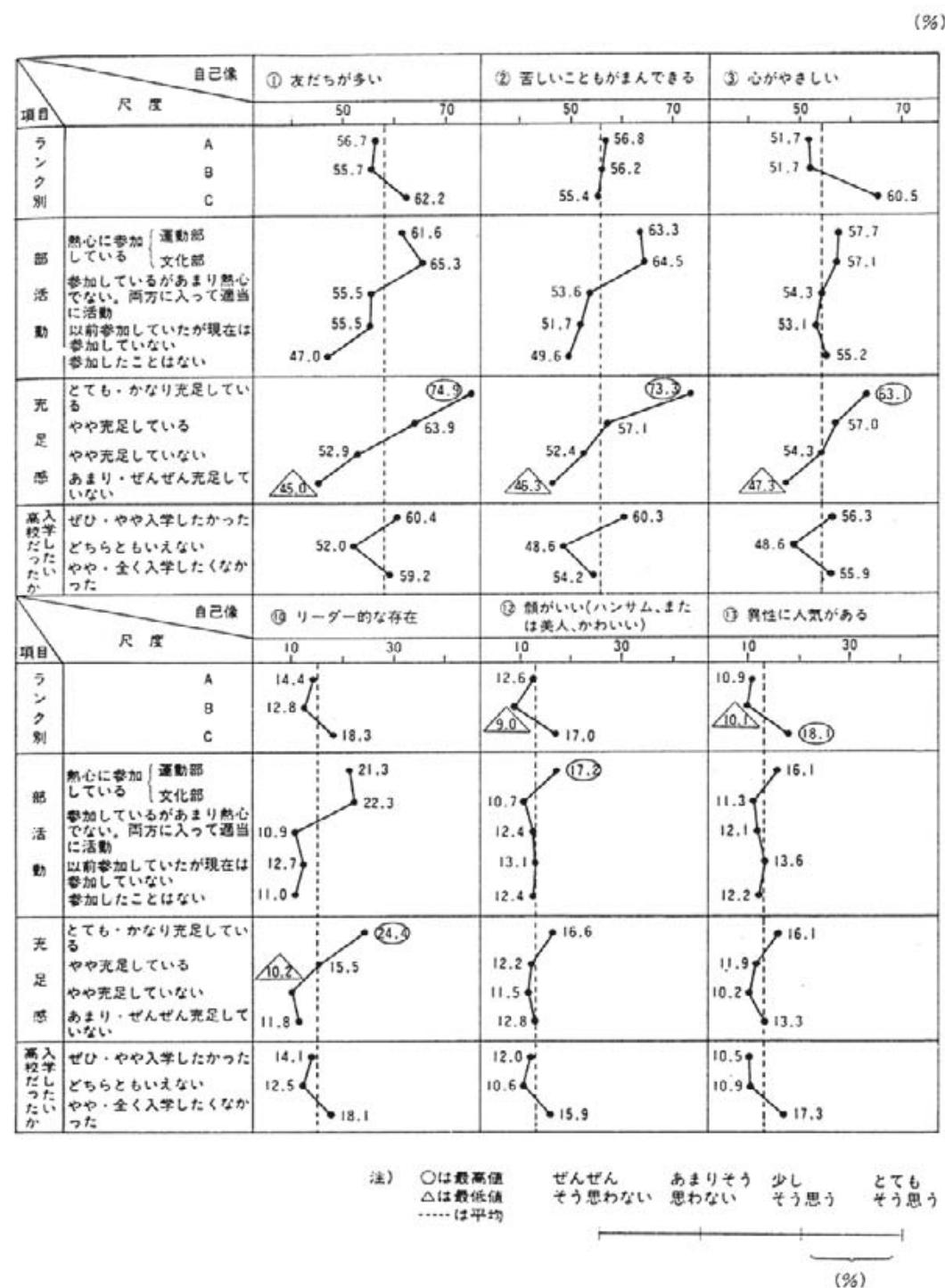
図I-2 生徒たちの抱く自己像



そうした理由を考える手がかりとして「リーダー的な存在」をとりあげてみよう。すでに触れた通り、Aランクの高校に進学し

た生徒の多くは、小・中学校時代に生徒会役員やクラブの部長・副部長やクラス代表などのリーダー的な地位を経験してきた者たちで

図 I-3 自己像×学校ランク・部活動・充足感・入学したい高校だったか



ある。それが高校に来ると、多くの者はひとりの普通の生徒として、生徒集団の中に埋没してしまう。なにしろAランクの高校にはリーダー経験をしてきた者が多く集まっているので、そうした中で、リーダーシップを發揮できなくなり、それが自己評価を低めているのであろうし、それとは逆に、Cランクの高校に入った生徒の中には、同じような生徒にかこまれ、生まれてはじめてリーダーシップを発揮する生徒が生まれてこよう。そうした高校のランクが自己像に明暗をもたらしたのであろう。

部活動について見てみると、当然ながら熱心に参加している生徒の自己肯定率は高く、特に運動部に参加している生徒は全項目で平均値よりかなり高い肯定率を示している。部活動での自信の反映と言えよう。一方、熱心でない生徒・両方にあって適当に活動している生徒・以前は参加していたが現在不参加の生徒・参加したことのない生徒、つまり部活動に消極的、あるいは拒否している生徒の自己肯定率は、平均値以下が多い。

充足感はどうだろうか。

図の示す通り、「友だちが多い」「苦しいこともがまんできる」「心がやさしい」では歴然たる差が生じている。「とても」「かなり」充足している生徒の肯定率が、7割から6割に達するのに比べて「あまり」「ぜんぜん」充足していない生徒の自己肯定率は約4割にすぎない。

現在の自己像の肯定率と充足感の程度とは、最も相関関係が高いと言えよう。

現在通学している高校ははじめから入学したい学校だったか。「ぜひ」「やや」入学したかった学校と答えた者と「やや」「全く」入学しなくなかった学校と答えた者の自己肯定率が高いのに比べて、「どちらともいえない」と、入学校に対して積極的に肯定も否定もしない消極的な宿泊りんの生徒の自己肯定率は、他の二者よりも低い。

また観点を変えて、公立と私立、地方と東京では、生徒たちの自己像はどう変化するだろうか。結論のみをあげると、公立の高校生に比べて私立の高校生の方が、全項目肯定率が高い。また、地方と東京の生徒との対比では、「苦しいこともがまんできる」という項目で、

地方 54% < 東京 58%

と、東京の肯定率がやや高かった以外は、地方の生徒の肯定率が高かった。「ナウイ」という問い合わせに対しても、

地方 18.2% > 東京 18.1%

という数値が得られている。高校生について見る限りでは、地方の高校生の方が東京の高校生より若干自信を持っているように思われるが、この点については高校の意味が、東京と地方とで異なるとも考えられるので、もう少しマクロ的な立場からの考察が必要であろう。

### 3. 理想の将来像

表I-2は現在の高校生がどう生きたいか、人間としてどう評価されたいかという問いかけに対する回答を示している。なお同様の問いかけを中学生にも試みているので併せて検討してみたい（表I-3参照）。

男女ともどう生きたいかで最も支持されているのは、①「人の役に立ち」そして②「頼りになる」人間像である。「少しそう思う」を含めた肯定率は、

①人の役に立つ ②頼りになる

|    |     |     |
|----|-----|-----|
| 男子 | 74% | 73% |
| 女子 | 80% | 78% |

に達する。つまり他人から信頼される人間でありたいとは思っているが⑥のように「人の上に立ち」積極的に他の人々を引っ張っていく人間には、なれそうもないしなる気もないというのであろう。

そして、③平凡でいいから安定した人生

(64%) で、④あまり目立たずふつうの人でありたい (54%) と続く。

学年別に見ると、「平凡でいいから安定した人生を送りたい」と思う者が1年44%、2年41%、3年39%（「いつも」「わりと」そう思っている合計）と進級するにしたがって減少するのに対して、「頼りになる人間だと人から思われたい」と思う者は、1年42%、2年43%、3年43%とほぼ横バイ状態を示している。表1-3の中学生の結果では、平凡で安定し、目立たずふつうの人生を送りたいと考える生徒が圧倒的に多かったのと比較すると、やはり高校生の場合、社会からの信頼、あるいは社会的な達成に生徒たちの目が注がれてくる。

これは、生徒たちの社会性が成長してきた証しとも言えよう。

なお、中学生では男女差はそれほど顕著ではないが、高校生では、「平凡でいいから安定した人生」を望んでいるのが、「少しそう思う」を含めた肯定率は男子58%であるのに対して、女子は72%とかなり高い。一方、「人の上に立つ人になりたい」と思う者は、男子56%に対して、女子は43%とかなりの開きを示す。男子の方が積極性や社会性を志向するのに比べて女子は、安定性を重視し家庭志向の傾向が顕著となる。性差に対応して、現実的に将来を考え始めたのは確かだが、現在の世の中を考えると、女子たちにもう少し社会志向の

表I-2 どう生きたいか

| 項目                                          | 尺度 | (%)                 |           |                                         |
|---------------------------------------------|----|---------------------|-----------|-----------------------------------------|
|                                             |    | いつも・わりと<br>そう思っている  | 少しそう思っている | あまり・ぜんぜん<br>そう思わない                      |
| ① 人の役に立つ人間だと<br>思われたい (44.9)                | 男子 | 17.2<br>———<br>42.5 | 25.3      | 31.0<br>———<br>17.3 9.2<br>———<br>26.5  |
|                                             | 女子 | 15.4<br>———<br>48.0 | 32.6      | 31.9<br>———<br>16.1 4.0<br>———<br>20.1  |
| ② 頼りになる人間だと<br>思われたい (42.4)                 | 男子 | 18.1<br>———<br>42.1 | 24.0      | 30.8<br>———<br>17.7 9.4<br>———<br>27.1  |
|                                             | 女子 | 12.9<br>———<br>42.7 | 29.8      | 35.4<br>———<br>17.4 4.5<br>———<br>21.9  |
| ③ 平凡でいいから安定した<br>人生を送りたい (41.3)             | 男子 | 15.8<br>———<br>36.5 | 20.7      | 21.5<br>———<br>23.3 18.7<br>———<br>42.0 |
|                                             | 女子 | 19.8<br>———<br>48.1 | 28.3      | 23.7<br>———<br>18.1 10.1<br>———<br>28.2 |
| ④ あまり目立たずふつうの<br>人でありたい (28.1)              | 男子 | 8.8<br>———<br>26.6  | 17.8      | 23.8<br>———<br>32.6 17.0<br>———<br>49.6 |
|                                             | 女子 | 9.0<br>———<br>30.5  | 21.5      | 27.9<br>———<br>31.1 10.5<br>———<br>41.6 |
| ⑤ 優秀であると<br>思われたい (26.3)                    | 男子 | 10.1<br>———<br>28.3 | 18.2      | 28.9<br>———<br>30.3 12.5<br>———<br>42.8 |
|                                             | 女子 | 6.3<br>———<br>23.6  | 17.3      | 32.6<br>———<br>33.4 10.4<br>———<br>43.8 |
| ⑥ 人の上に立つ人間に<br>なりたい (25.3)                  | 男子 | 14.3<br>———<br>31.3 | 17.0      | 25.0<br>———<br>29.2 14.5<br>———<br>43.7 |
|                                             | 女子 | 5.3<br>———<br>17.3  | 12.0      | 25.2<br>———<br>42.5 15.0<br>———<br>57.5 |
| ⑦ つまらない人間だと<br>思う (23.3)                    | 男子 | 11.0<br>———<br>23.0 | 12.0      | 23.0<br>———<br>34.6 19.4<br>———<br>54.0 |
|                                             | 女子 | 8.6<br>———<br>23.7  | 15.1      | 30.7<br>———<br>32.8 12.8<br>———<br>45.6 |
| ⑧ 自分の気持ちをわかってく<br>れる友だちがいなくてさみ<br>しい (10.7) | 男子 | 5.0<br>———<br>10.6  | 5.6       | 15.4<br>———<br>45.0 29.0<br>———<br>74.0 |
|                                             | 女子 | 4.2<br>———<br>10.7  | 6.5       | 17.8<br>———<br>42.2 29.3<br>———<br>71.5 |

注) ( )内は「いつも」「わりと」そう思っている割合の全体値

強もあ役れ10のてはに安心と

心らよ4をて暗短校社つり

表 I - 3 モノグラフ・中学生の世界 vol. 12

中学生の自己像——スマート・イズ・ビューティフル——

| 項目                       | 尺度 |                  | いつも・わりと<br>そう思っている | 少しそう思っている | あまり・ぜんぜん<br>そう思わない | (%)  |
|--------------------------|----|------------------|--------------------|-----------|--------------------|------|
|                          | 男子 | 女子               |                    |           |                    |      |
| ① 平凡でいいから安定した人<br>生を送りたい | 男子 | 22.9<br>└ 46.5 ─ | 23.6               | 23.8      | 16.5<br>└ 29.7 ─   | 13.2 |
|                          | 女子 | 19.9<br>└ 49.3 ─ | 29.4               | 26.8      | 15.4<br>└ 23.9 ─   | 8.5  |
| ② あまり目立たずふつうの人<br>でありたい  | 男子 | 18.3<br>└ 37.6 ─ | 19.3               | 23.4      | 25.0<br>└ 39.0 ─   | 14.0 |
|                          | 女子 | 10.1<br>└ 31.1 ─ | 21.0               | 32.9      | 27.2<br>└ 36.0 ─   | 8.8  |
| ③ 頼りになる人間だと<br>思われたい     | 男子 | 12.1<br>└ 27.3 ─ | 15.2               | 29.3      | 30.1<br>└ 43.4 ─   | 13.3 |
|                          | 女子 | 16.2<br>└ 32.4 ─ | 16.2               | 35.8      | 23.9<br>└ 31.8 ─   | 7.9  |
| ④ 人の後に立つ人間だと<br>思われたい    | 男子 | 10.2<br>└ 24.3 ─ | 14.1               | 31.1      | 31.2<br>└ 44.6 ─   | 13.4 |
|                          | 女子 | 10.6<br>└ 28.9 ─ | 18.3               | 34.7      | 30.0<br>└ 36.4 ─   | 6.4  |
| ⑤ 人の上に立つ人間に<br>なりたい      | 男子 | 11.4<br>└ 22.1 ─ | 10.7               | 23.4      | 38.6<br>└ 54.5 ─   | 15.9 |
|                          | 女子 | 6.6<br>└ 17.5 ─  | 10.9               | 22.0      | 44.0<br>└ 60.5 ─   | 16.5 |
| ⑥ 優秀であると思われたい            | 男子 | 7.5<br>└ 16.2 ─  | 8.7                | 22.9      | 39.7<br>└ 60.9 ─   | 21.2 |
|                          | 女子 | 4.8<br>└ 13.6 ─  | 8.8                | 23.7      | 45.6<br>└ 62.7 ─   | 17.1 |

表 I - 4 どう生きたいか×学業成績・卒業後の進路

| 項目                                   | 学業成績・<br>進路 |           | 学業成績(数学)              |                        | 卒業後の進路         |               |  | (%) |
|--------------------------------------|-------------|-----------|-----------------------|------------------------|----------------|---------------|--|-----|
|                                      | 上位群         | 下位群       | 試験・実験・実<br>の手伝いその他、未定 | 各種学校・専<br>修学校・短期<br>大学 | 4年制大学<br>(国公立) | 4年制大学<br>(私立) |  |     |
| ① 人の後に立つ人間だ<br>と思われたい                | 48.2 (1)    | 44.5 (1)  | 44.1 (2)※             | 46.5 (2)※              | 44.9 (1)       | 44.2 (1)      |  |     |
| ② 頼りになる人間だと<br>思われたい                 | 46.4 (2)    | 39.6 (3)※ | 38.9 (3)※             | 39.8 (3)※              | 44.5 (2)       | 42.2 (2)      |  |     |
| ③ 平凡でいいから安定<br>した人生を送りたい             | 38.7 (3)    | 40.0 (2)※ | 44.8 (1)※             | 51.8 (1)※              | 38.6 (3)       | 38.5 (3)      |  |     |
| ④ あまり目立たずふつ<br>うの人でありたい              | 27.5 (6)※   | 28.2 (5)※ | 30.0 (4)              | 34.2 (4)               | 27.2 (6)※      | 25.4 (6)※     |  |     |
| ⑤ 優秀であると思われ<br>たい                    | 35.2 (5)    | 23.6 (7)※ | 18.7 (7)※             | 19.7 (6)※              | 30.0 (4)※      | 27.4 (5)      |  |     |
| ⑥ 人の上に立つ人間に<br>なりたい                  | 34.6 (4)※   | 23.9 (6)  | 21.0 (6)              | 16.2 (7)※              | 28.2 (5)※      | 27.8 (4)※     |  |     |
| ⑦ つまらない人間だと<br>思う                    | 24.7 (7)    | 30.0 (4)※ | 27.3 (5)※             | 20.7 (5)※              | 25.2 (7)       | 19.3 (7)      |  |     |
| ⑧ 自分の気持ちをわか<br>ってくれる友だちが<br>いなくてさみしい | 12.7 (8)    | 12.6 (8)  | 12.9 (8)              | 7.3 (8)                | 11.8 (8)       | 9.4 (8)       |  |     |

注)

数学の成績の自己評価

トップ 上位から 上位から まん中 中の下 うしろの方  
の方 10%以内 30%以内 ぐらい ぐらい

ぜんぜん  
そう思わない  
あまりそう  
思わない  
少しそう  
思っている  
わりとそう  
思っている  
いつもそう  
思っている

16.9.1 16.0 27.4 20.3 22.6

(%)

上位群

下位群

( )はそれぞれの項目内での順位  
※印は平均順位との違いを示している。

強さを望みたい気がする。

次に学業成績や卒業後の進路とかれらの望む生き方との関係を見てみたのが表I-4である。

まず学業成績のいかんにかかわらず、「人の役に立つ人間だと思われたい」は最も支持されているのがわかる。また成績上位群（上位10%以内と答えた者）の生徒は、積極的に人の上に立つ人生を志向している。それに対して成績下位群（うしろの方と答えた者）の生徒は、「自分はつまらない人間だと思う」が3割に達し、概して自己不信の気持ちを強く持ち、安定志向も強い。やはり成績の不振が彼らの心を暗くしているのであろう。

卒業後の進路はどうだろうか。安定志向は「就職、家業、家の手伝い、その他、未定」と「各種学校・専修学校、短期大学」を志望

している生徒に高い。特に「各種学校・専修学校、短期大学」を志望する生徒の52%は「わりと」「いつも」そう思っていると答えている。それに対し「優秀であると人から思われたい」、「人の上に立つ人間になりたい」などの積極的な生き方を望む者は4年制大学志望者に多い。こうした生徒の場合、社会的な達成を可能にする手段として、大学進学を考えているのであろうから、こうした結果が得られるのも、ある程度当然のように思われる。こうしてみると、学歴と社会的達成とが従来の枠組と同じように機能しているのが感じられる。しかし、これから社会を考えると、達成を断念するのではなく社会的な達成を目指して各種学校・専修学校へ入る者もいてよいような気がしてならない。

## 4. 卒業後の進路選択

普通科の生徒は、卒業後の進路選択をどう志望しているのだろうか。その点を答えてもらったのが図I-4である。一見してわかるように、圧倒的に多いのが進学志望者であり、4年制大学志望は71%に達し、短期大学志望を含めた大学進学志望者は80%と8割に及んでいる。しかし、現実の進路状況はどうか。昭和57年度普通科の生徒の進路は、4年制と短期大学への進学は40%、各種学校・専修学校への進学27%、就職27%となっている（昭和58年2月15日付「進研ニュース」102号）。つまり、かれらの志望と現実との間に、かなりの開きが見られる。

そこで、かれらが最も志向している4年制

大学への進学志望の動向を、もう少し詳しく見ていくことにしたい。

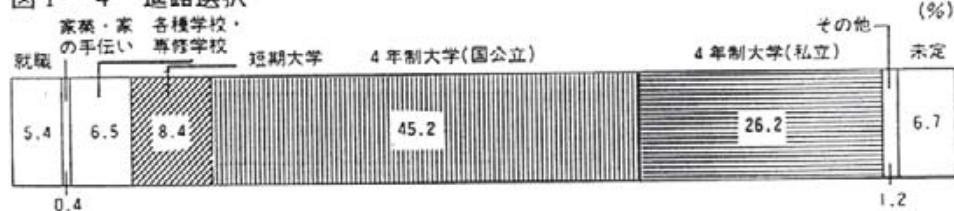
図は省略したが、男女別では、男子の83%が4年制大学志望であるのに対して、女子は56%である。もっとも男子との差に相当する分が短期大学19%と各種学校・専修学校10%を志望しており、トータルとしての進学志向率に大きな開きは認められない。

学年別では、

|       | 1年  | 2年   | 3年   |
|-------|-----|------|------|
| 国公立大学 | 48% | 49%  | >38% |
| 私立大学  | 18% | <25% | <36% |

のように2年から3年に進級し、自己の成績などを基に具体的な進路決定の段階になると

図I-4 進路選択



願望が現実に近づくのか、10%強の生徒が、国公立大学から私立大学へと志望変更している。

また、国公立大学志望では

|      |     |
|------|-----|
| Aランク | 62% |
| Bランク | 47% |
| Cランク | 24% |

と学校ランク別に見ると歴然とした差が出てくる。Cランクの高校の生徒の中に最初から国公立大学をあきらめて私立大学志望の方が多い(37%)。

さらに、国公立大学を志望するか否かに大きく影響を与えるものに、数学の成績がある(成績上位群の志望55%、下位群の志望32%)。

では、こうした志望動向を示した生徒たちは、一生懸命頑張って一浪ぐらいしたらどの程度の大学に入学できると思っているのであろうか。図I-5に示すように具体的な大学名を挙げるのは避けて、一応①「国公立の最難関大学」が東大・京大など、②「私立の最難関大学」が早大・慶大などに相当すると想定して質問してみた。しかし、こうした問い合わせは、生徒たちの志望や地方差によってかなりわれわれと違った大学を想定する場合も考えられる。

しかし、いずれにせよ図I-5を入れそう(「たぶん」と「なんとかなるかも」と無理

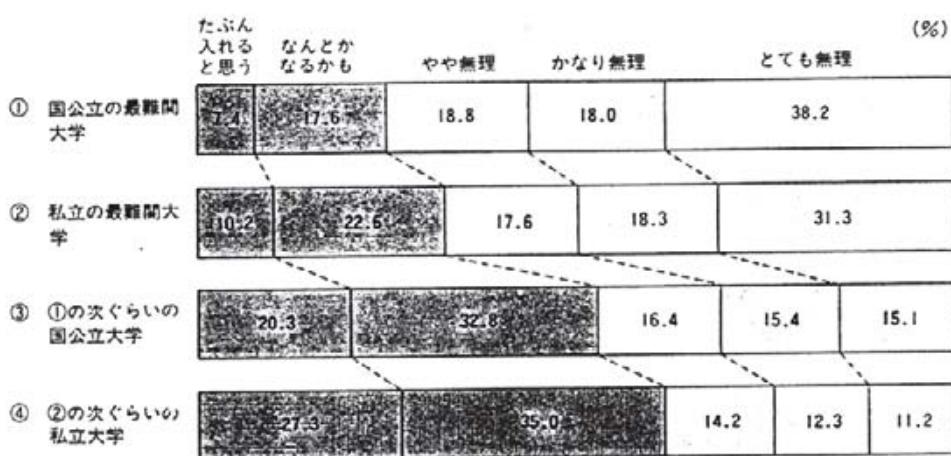
(「やや」から「とても」)に分けてみると、

|               | 入れそう | 無理  |
|---------------|------|-----|
| ①国公立の最難関大学    | 25%  | 75% |
| ②私立の最難関大学     | 33%  | 67% |
| ③④の次ぐらいの国公立大学 | 53%  | 47% |
| ④⑤の次ぐらいの私立大学  | 62%  | 38% |

のように、生徒の意識の中に難易度により大学ランクが形づくられていることがわかる。そして③、④クラスなら5割以上の生徒がなんとかなるかもと考えている。

ここで注目すべきことは、①「国公立の最難関大学」に一浪ぐらいして一生懸命頑張れば入れる(「たぶん」入れると思うと「なんとかなるかも」と思っている者が25%いる事実である。つまり、普通科の高校生の内、4人は1人は、頑張れば東大・京大にも行けると思っている。今まで見てきたように現実の自己像には否定的な自信のなさが目立っていたかれらではあるが、それは現在の姿であって、自分の本当の姿ではない、つまり本当はもっと実力があり、やればできるのだと思っているのであろうか。受験を目前にしている(11月に調査している)3年生でも22%はなんとかなると信じている。実際に多くの可能性を秘めているから、生徒たちの気持ちも理解できる反面、この数値を見て、現実の受験はそん

図I-5 一生懸命頑張ったら入学できるか(一浪ぐらいしたら)



・大  
う。  
の最  
それ  
かで  
によつ  
想像  
され  
自  
と  
る  
1月  
とか  
を秘  
でき  
そん

なに甘くはない、もっと自分の実力を十分に認識して志望校を選択しないと大変だという思いにかられたのは、教師として心配しすぎなのであろうか。

ところで、これと同じような調査は昭和54年にも試みられている(『モノグラフ・高校生'80vol.1 高校生の描く未来像—その進路と大学選択—』)。やや設問の仕方が異なるが、この時は大学名を挙げてあるので、その結果を引用すると以下のようなになる。

| 「たぶん」「まあ」入学できそうの割合 |     |  |
|--------------------|-----|--|
| 東大や京大              | 23% |  |
| 一橋大や東工大            | 35% |  |
| 早大や慶大              | 47% |  |

「国公立の最難関大学」が東大や京大に該当するが、今回の調査とは大きな変動のないことがわかる。ところが早大や慶大と今回の「私立の最難関大学」との関係をみると、47% → 33%

となって、今回の調査では「なんとかなりそう」だという者が14%も減少している。これは早大や慶大と「私立の最難関大学」とが違っているのではなく、むしろ生徒たちが早大、慶大の難しさを意識した結果であろう。なぜならば、昭和54年は、共通一次試験の第一回目が行われた年にあたる。その当時、私立の最難関大学の難易度は東大・京大に次ぐほど上昇していない状況下にあった。しかし共通一次の実施により、3年間に、早大や慶大など、大変な難関校となり、生徒たちに確実にそうした意識が、植え付けられてきている。共通一次のもたらした皮肉な結果と言えなくもない。

次に数値の羅列を避けるために、その他の要素とのクロス結果を、図表を省略し傾向のみを要約すると、次のようなになる。

男女間では、どのランクの大学でも約10%ほど男子の方が可能性ありと答える数値が高い。これは、女子の方がなかなか浪人しにくくいという社会通念の中で現実的な選択をせざるを得ないという反映なのかもしれない。

学校ランク別を見ると、国公立大学では

|                   | Aランク | Bランク | Cランク |
|-------------------|------|------|------|
| ①国公立の<br>最難関大学    | 35%  | 18%  | 18%  |
| ③④の次ぐらい<br>の国公立大学 | 67%  | 48%  | 39%  |

と、ランク順に可能性ありと信じる生徒が低くなるが、私立大学では、現実の合格率は別としても

|                   | Aランク | Bランク | Cランク |
|-------------------|------|------|------|
| ②私立の最<br>難関大学     | 42%  | 22%  | 29%  |
| ④⑤の次ぐらい<br>の最難関大学 | 71%  | 53%  | 58%  |

と予想以上に、Cランクの高校の生徒が自信を持っているのが目につく。

部活動については、運動部か文化部のどちらかに入っているが、あまり熱心でない生徒と、両方に入って適当に活動している生徒がすべてに平均以下の低い数値を示している。これは自信のなさや、やる気のなさの表れとも考えられる。

充足感を見てみると、「とても」「かなり」充足している生徒が平均以上の高い自信を持つのに対し、「あまり」「ぜんぜん」充足していない生徒は将来の頑張りや可能性についても否定的な見方をしている。

数学の成績と比較してみると、上位群(10%以内)の成績の生徒は、Aランクの高校の生徒より10%ほど高く、他のクロス集計と比べても最高の自信度を示している。

## 5. 将来入社したい会社

最後に将来どのような会社に入社したいかという問い合わせの結果を紹介しておこう。そ

の結果が表I-5である。生徒たちは多くは、①学歴にとらわれず②名前は通っていないが

実力主義をとる会社に、将来入社したいと望んでいる。それに対して、④将来の出世は難しいかもしれないが世間に名の通った一流企業や⑤仕事はつまらないが非常に安定した会社には入りたくないと思っている。この傾向は、属性により①、②の会社が逆になったり、女子やAランクの高校の生徒に③仕事は大変だが給料のとてもよい会社が2位に位置付けられるなど多少の変化はあっても、学年別、部活動、充足感、はじめから入学したい学校だったか、父母の職業、学業成績、卒業後の進路などのクロス集計の結果でも同じような傾向が得られている。

今の若者は保守志向（『モノグラフ・高校生'82 vol. 6 高校生の政治意識』参照）、安定志向が強いと言われている。確かにそうなのであるが、この表I-5は好意的に評価すれば、一流会社でなくとも自分の力を発揮できればよい。つまり実力主義志向が読み取れよう。

それは、先に見た進学に対する過信、願望の中で、自分の実力はもっとあるのだからという気持ちと共通しており、将来は自分の実力を生かせる分野に進みたいという願いなのであろう。こうした反面、大学生の就職動向などを見ているとやはり一流会社を目指す安定志向が根強い。したがって、就職はまだ先のことだという気持ちが安易な形で実力主義の願いとなり、それが数値となって表れたのかかもしれない。

しかし、教師の一人としては甘いかもしれないが、学歴社会の中で輪切りにされてきた生徒たちが、実力を生かせる場を模索している状況、つまり若者の革新性の表れだと理解してやりたい。それだけに教師としても、かれらのこうした現在の意識を育てていけるような進路指導を模索しなければならないという気持ちを強く感じた。

表I-5 将来入社したい会社像

(%)

| 項目                             | 尺度           |              | どちらでもない | 入社したくない      |      |
|--------------------------------|--------------|--------------|---------|--------------|------|
|                                | ぜひ           | できたら         |         | あまり          | ぜんぜん |
| ① 学歴にとらわれず実力第一主義の経営方針をとる会社     | 23.4<br>57.8 | 34.4<br>57.8 | 32.0    | 6.0<br>10.2  | 4.2  |
| ② 名前は通っていないが実力次第で大きな仕事のできる会社   | 18.6<br>57.3 | 38.7<br>57.3 | 30.0    | 8.0<br>12.7  | 4.7  |
| ③ 仕事は大変だが給料のとてもよい会社            | 16.9<br>54.2 | 37.3<br>54.2 | 32.2    | 8.2<br>13.6  | 5.4  |
| ④ 将來の出世は難しいかもしれないが世間に名の通った一流企業 | 5.8<br>25.5  | 19.7<br>25.5 | 37.8    | 23.3<br>36.7 | 13.4 |
| ⑤ 仕事はつまらないが非常に安定した会社           | 5.4<br>20.2  | 14.8<br>20.2 | 30.2    | 29.8<br>49.6 | 19.8 |

望の  
とい  
実力  
ので  
向な  
安定  
先の  
義の  
のか  
しれ  
きた  
てい  
理解  
かれ  
よう  
いう

## 第II章 高校生にとっての授業



### 1. 授業を受ける気持ち

学校生活の中心は授業であり、授業を抜きにして学校生活を語れないのは確かであろう。それでは、普通高校の生徒たちは、授業をどのように受け止めているのだろうか。それを調べたのが図II-1である。

普通高校では程度の差こそあれ、大学進学の希望者をかかえており、教師も生徒も常に大学入試を意識しないわけにはいかない状況下にある。受験体制下の高校教育と言われるゆえんである。こうした事情を反映して、「大学入試を意識した授業が多いか」の質問に対して、「とてもそうである」と答えた者は19%で、これは「予習、宿題の多い授業」「ノートをきちんととらせる授業」を4~5%も上

回っている。しかし、「かなりそうである」と肯定的な答えを合計すると、「ノートをきちんととらせる授業が多い」が58%とトップになり、「大学入試を意識した授業が多い」はわずかの差で、2位となる。

しかし、いずれにせよ、ノートをきちんととらせる形の知識伝達型の授業が多く、「生徒の発言を促したり」、「冗談を言ったりする楽しい雰囲気の授業」はいずれも32%で、少数例にとどまっているように思われる。

そこでまず「大学入試を意識した授業が多いか」を学校ランクや希望する進路などとの関係で調べたのが表II-1である。全体としていわゆる進学校（Aランク）の中に進学を意

てス  
ラン  
傾向  
大學生  
いと  
が1  
修短  
  
義  
ト  
生  
数

識した授業に敏感に反応する生徒の割合が高く、意識することが「多い」と答えた者は61%で、Cランクの37%より2倍近くの高さに達

する。

次に、個々の生徒について、進路希望と入試をどれくらい意識するか、その関連を調べ

図II-1 現在の授業に対する感想

|                   | とてもそうである | かなりそうである | あまりそうでない | (%)  | ぜんぜん<br>そうでない |
|-------------------|----------|----------|----------|------|---------------|
| ノートをきちんととらせる      | 13.9     | 43.7     | 35.7     | 6.7  |               |
| 大学入試を意識している       | 18.8     | 32.2     | 37.7     | 11.3 |               |
| 新しい知識がどんどん増える     | 9.6      | 38.3     | 43.8     | 8.3  |               |
| 下調べをよくし、熱心に教えてくれる | 7.0      | 34.7     | 46.0     | 12.3 |               |
| 予習(レポート)や宿題が多い    | 15.3     | 23.9     | 48.0     | 12.8 |               |
| 教科書を最後まできちんと終える   | 9.3      | 29.3     | 43.1     | 18.3 |               |
| 生徒によく発言させる        | 6.6      | 25.8     | 52.8     | 14.8 |               |
| 冗談などで生徒をよく笑わせる    | 6.1      | 26.2     | 54.5     | 13.2 |               |
| 教え方がていねいでわかりやすい   | 1        | 25.8     | 53.5     | 17.2 |               |
|                   | 3.5      |          |          |      |               |

表II-1 大学入試を意識した授業

| 尺度   |                   | とても多い | かなり多い | あまり多くない | 少ない  |
|------|-------------------|-------|-------|---------|------|
| 全 体  |                   | 18.8  | 32.2  | 37.7    | 11.3 |
|      |                   | 51.0  |       | 49.0    |      |
| ランク別 | A                 | 24.7  | 36.4  | 30.4    | 8.5  |
|      |                   | 61.1  |       | 38.9    |      |
| ランク別 | B                 | 18.3  | 36.2  | 36.1    | 9.4  |
|      |                   | 54.5  |       | 45.5    |      |
| ランク別 | C                 | 11.9  | 24.6  | 47.6    | 15.9 |
|      |                   | 36.5  |       | 63.5    |      |
| 進路希望 | 4年制大学(国公立)        | 23.7  | 36.8  | 31.5    | 8.0  |
|      |                   | 60.5  |       | 39.5    |      |
| 進路希望 | 4年制大学(私立)         | 14.0  | 25.9  | 43.9    | 16.2 |
|      |                   | 39.9  |       | 60.1    |      |
| 進路希望 | 各種学校・専修学校<br>短期大学 | 11.3  | 30.4  | 47.6    | 10.7 |
|      |                   | 41.7  |       | 58.3    |      |
| 進路希望 | 就職・家業・未定          | 19.8  | 31.5  | 35.6    | 13.1 |
|      |                   | 51.3  |       | 48.7    |      |

てみると、4年制の国公立大学志望者は、Aランクの高校に在籍する者と非常によく似た傾向を示している。

それに対して、私立大学志望者は、国公立大学以上の難関と言われる私立大学志望者が国公立大学志望者の中に吸収されてしまっているのか、入試を意識した授業が「とても多い」が14%と、国公立大学志望者の各種学校・専修学校は半数程度にとどまっている。これは短期大学、各種学校・専修学校志望者の11%

とはほぼ同じ比率にあたる。この数字は何を物語るのだろうか。

「普通科へ入ったのだから、何となく大学へ入りたいと思う。共通一次ともなると8教科の勉強が必要だから、国公立大学は避けたい。しかし、私立大学なら、学部も多いし何とかなるだろう」。そうした気持ちが、私立大学志望者に緊張感のなきをもたらし、入試を意識した授業に敏感に反応しない形となって表れるのかもしれない。

## 2. ノートのとり方

すでに触れたように、授業の形態として講義形式が多く採られているが、その中で「ノートをとらせる授業」について、学年別と学校生活の充実度からみたのが表II-2である。

「ノートをとる」という作業は、全体の半数以上の58%が「多い」と感じている。しか

し、その中で興味を引くのは学年別にみた時の差の大きさである。1年では、71%が「多い方である」と答えているのに対して、2年になると、62%と漸減し、3年に至っては、38%まで減少している。

一般に、入学当初の生徒に対しては、教師

表II-2 ノートをきちんととらせる授業

(%)

| 項目                    |                       | 尺度    |       |         |     |
|-----------------------|-----------------------|-------|-------|---------|-----|
|                       |                       | とても多い | かなり多い | あまり多くない | 少ない |
| 全 体                   |                       | 13.9  | 43.7  | 35.7    | 6.7 |
| 学 年 別                 | 1 年                   | 20.7  | 50.2  | 25.0    | 4.1 |
|                       | 2 年                   | 70.9  |       | 29.1    |     |
| 高 校 生 活 の 充 実 度       | 3 年                   | 12.6  | 49.2  | 33.8    | 4.4 |
|                       | とても} 充足している<br>かなり}   | 61.8  |       | 38.2    |     |
| やや充足している              | 7.7                   | 30.3  | 49.8  | 12.2    |     |
|                       | やや充足していない             | 38.0  |       | 62.0    |     |
| あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 20.4                  | 46.8  | 28.0  | 4.8     |     |
|                       | やや充足していない             | 67.2  |       | 32.8    |     |
| やや充足していない             | 13.1                  | 46.2  | 36.7  | 4.0     |     |
|                       | あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 59.3  |       | 40.7    |     |
| やや充足していない             | 10.2                  | 45.5  | 39.4  | 4.9     |     |
|                       | あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 55.7  |       | 44.3    |     |
| あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 11.8                  | 39.0  | 38.1  | 11.1    |     |
|                       | あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 50.8  |       | 49.2    |     |

の側も板書をていねいにしたり、ノートをとるよう促して口述したりすることが多い。そして、生徒自身の判断でノートをとった結果、ポイントの記述が脱落することなどがないように気を配っている。また生徒の方でも「何でも書いてやろう」という意気込みが見受けられる。しかし、3年になるとノートをとる意欲が減る。これは、好意的な解釈をするなら、ノートをとる要領を生徒たちが会得した成果というように思える。そして、生徒の進歩と共に教師も、生徒を信頼して板書を少なくしていく。それが「ノートをとらせる授業が少なくなった」という感じを抱かせているのではないかと思われる。もっとも、「ノートをとらせる授業が多いか」どうかは、教科の内容、時と場合、教師間の差などさまざまな要素に左右されてしまうが、これだけ学年差がはっきりしていると、多少の学校差はある、学年によりノートのとり方に開きが見られるのは、否定し難いように考えられる。

一方、どのような学校生活を送っている生徒が「ノートをとらせる授業が多い」といふ受け止め方をしているかを見てみると、表II-2の下欄のように、学校生活に充足感を持っている生徒ほど「多い」ととり、充足感が低い生徒ほど「ノートをとらせる授業は少ない」と答えているのが至につく。この結果は、充足感を持っている生徒にとって、ノートをとることは嫌な作業ではなく、ノートをとることがかえって充足感を高めているのを暗示している。

それに対し、充足感に欠ける生徒は、教師がノートをとれるよう板書しないと口述の字からポイントをノートすることはできないので、授業内容が右から左へと抜けていくって何も残らないということになる。つまり、本来ノートすべき授業もただ聞き流してしまい、それを、ノートをとらせない授業と勝手に思い込んでしまっているのではないかと考えられる。

もちろん、学校生活の充足感は、授業からだけ得られるものではないと思うが、学校の中心が授業である以上、授業から充足感が得られない状況で、学校生活の充足感を得るのは難しいだろう。「ノートをとらせる」ことを、授業を聞くつと同じレベルに置きにくくとは思うが、日々の授業が単なる講演会と違うところは、必要に応じてノートに残し、それに続く授業との関連をつなげていくことであろう。したがって、「ノートに残す」という作業は、生徒と授業とのかかわり合いの程度を示すものとして、重視する必要があろう。

これまで、どんな授業が多いのかを見てきたが、それとは反対にどんな授業が少ないかをみると、「教え方がていねいでわかりやすい授業」が否定的に見られている。集計データは省略したが、「そうである」と肯定する者は29%、否定する者は71%に及んでいる。そして、この結果は後述する授業への希望のところにも反映されているので、その折、考察を加えることにしたい。

また、「教科書を最後まできちんと終える授業が多いか」どうかの問い合わせ、「ぜんぜんそうでない」が18%で、これに「まあそうでない」を加えると61%となる。もっとも、この背景としては、教科書の内容と授業時間数が正確にマッチしていないことも考えられるし（学校行事、定期テスト後の家庭学習期間等で授業時間数が減少）、教師によっては自作のプリントですすめたり、重要度に応じて深く掘り下げすぎて、教科書を最後までやり通せない場合もあり得よう。また、生徒の能力、学習態度が教科書の進度に影響を与える場合もあり、平面的に全部をおさえる必要のある教材では何としても最後までやる形をとろうが、進度ばかりを気にすることなく、生徒の理解度に合わせ、授業を進める教科もあり得る。こうした場合、教科書をやり残す状況が生まれてくる。

から  
校の  
が得  
るの  
こと  
くい  
と達  
そ  
て  
いう  
程度  
う。  
てき  
いか  
つい  
ータ  
者は  
そし  
とこ  
察を

る授  
そう  
ない」  
背景  
正確  
。(学  
年で授  
のブ  
よく掘  
任せな  
、学  
場合も  
る教  
ろう  
徒の  
り得  
況が

### 3. 生徒の望む授業

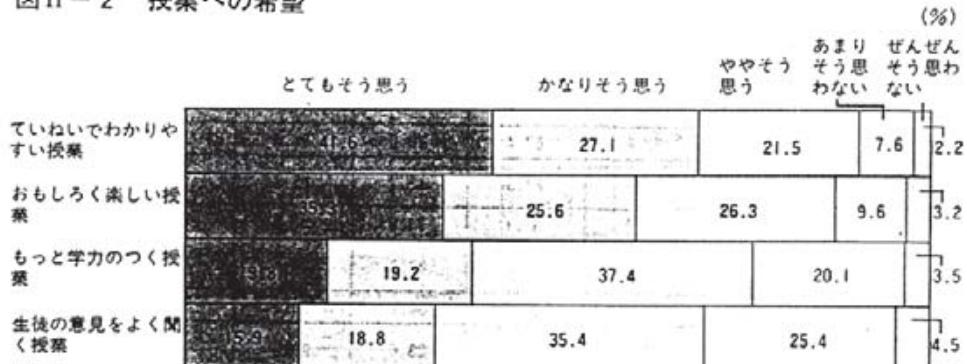
図II-2は授業に対する希望を示している。いずれも、生徒が希望するであろう項目を並べたので、当然のことながら、希望する数値は高く、肯定は最低でも70%あり、最高は90%にも達している。前述したように、生徒の側からは「ていねいでわかりやすい授業」が少ないと見られていたが、そうしたわかりやすい授業を望む声は、他を圧して「とてもそう思う」だけでも4割を超える。もちろん、教師の側としては、いい加減な手抜きの授業をしてごまかしているはずはないだろうが、90%以上の生徒が「ていねいでわかりやすい授業」を望んでいる事実は、冷静に受け止める必要があろう。もっとも、そうした場合「ていねいな」と「わかりやすい」という言葉が、何

を意味しているのかが問題となろう。

教師は教えるサイドなので教材を熟知しているから、わかりやすく教えたつもりになる。しかし生徒にとっては、その程度のわかりやすさでは、不十分なのかもしれない。生徒の身になって、ポイントをおさえ、学力を定着させる授業に心がけるべきなのであろう。

一般に、教育方法についての工夫は、小学校の方が優れ、中学校そして高校になるにつれて、教材研究に努力する反面、教材の提示に关心を示さなくなる傾向が認められる。高校教育がなれば義務教育化した現在、高等学校でも小学校にならって、教育方法の改善に目を向ける必要があるのかもしれない。

図II-2 授業への希望



### 4. 教科ごとの重み

普通高校の教科の中で、3年間にわたって全員が学ぶ必須教科は、英語、国語、社会、体育に限られている。そして、文科系に進学する者、就職志望で理数系を苦手とする者は、2年で理科と数学の単位が減少したり、履修しないでもよい学校もある。さらに、学校に

よっては、選択制が行われているので、3年では理科や数学と縁を切る場合も少なくない。もっとも、都立高校では、2年までは芸術を除いて、全員が共通履修をするタイプが多いが、地方の公立や大多数の私立では、2年から文理の二系列ばかりでなく、国公立大学向

け、私立大学向け、それぞれの文理別と多様なコースが用意されることが少なくない。

そこで生徒たちに「どの教科が大事だと思うか」と尋ねたところ、文科系、理科系のいずれに進むにも必要な英語は、予想通り1位となっており、87%の者が英語を3位までの内に入る大事な教科として、ランクしている(表II-3)。前述のように、英語は高校3年間を通して履修するものなので、進学する、しないを問わずに大事であるととらえているのであろう。英語に次いで1位にランクした者が多いのは、数学で27%、3位まで入れると67%となる。難度性が高く、つまずきの多い教科に違いないが、入試や就職がらみで大事と考えているのであろう。なお、1位にラン

クした者が3番目に多かったのは、国語であった。学習の基本教科である国語が、1位に17%、2位に17%と、3位までの累計でも61%しか集まっていない。これは、国語が日常生活の中に入っているだけに、ことさらとりたてて勉強するほど大事なものではないという感覚が育つのかもしれない。

そこで、ある教科をどうして重要だと思うのかを探るために、大事な教科の1位、2位にあげられた英語、数学と、数学の成績とのクロス集計を試みたのが、表II-4と表II-5である。

その中で英語、数学それぞれを1位にあげた者の数学をとりあげてみると、次のようになる。

表II-3 大事と思う教科

(%)

| 順位<br>教科 | 1位   | 2位   | 3位   | 4位   | 5位   | 6位   | 7位    |
|----------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 英語       | 42.0 | 21.1 | 23.9 | 4.6  | 3.1  | 1.8  | 3.5   |
|          |      | 63.1 | 87.0 | 91.6 | 94.7 | 96.5 | 100.0 |
| 数学       | 27.4 | 26.4 | 13.6 | 11.6 | 12.9 | 3.5  | 4.6   |
|          |      | 53.8 | 67.4 | 79.0 | 91.9 | 95.4 | 100.0 |
| 国語       | 17.1 | 16.7 | 27.3 | 13.7 | 15.7 | 5.7  | 3.8   |
|          |      | 33.8 | 61.1 | 74.8 | 90.5 | 96.2 | 100.0 |
| 社会       | 6.1  | 16.4 | 14.6 | 27.0 | 24.1 | 6.3  | 5.5   |
|          |      | 22.5 | 37.1 | 64.1 | 88.2 | 94.5 | 100.0 |
| 理科       | 5.3  | 16.2 | 18.0 | 23.6 | 20.5 | 8.6  | 7.8   |
|          |      | 21.5 | 39.5 | 63.1 | 83.6 | 92.2 | 100.0 |
| 体育       | 5.7  | 4.5  | 5.6  | 7.4  | 7.6  | 38.3 | 30.9  |
|          |      | 10.2 | 15.8 | 23.2 | 30.8 | 69.1 | 100.0 |
| 芸術       | 2.8  | 6.7  | 4.3  | 6.1  | 9.3  | 32.0 | 38.8  |
|          |      | 9.5  | 13.8 | 19.9 | 29.2 | 61.1 | 100.0 |

注) 各教科ともに下段は1位よりの累計

吾で  
1位  
でも  
が日  
うと  
ハト  
思  
2位  
との  
II-  
あげ  
うに

| 数学の成績   | 英語1位 | 数学1位 |
|---------|------|------|
| トップの方   | 34%  | 40%  |
| 4～5番    | 27%  | 45%  |
| 10番目ぐらい | 36%  | 34%  |
| まん中ぐらい  | 46%  | 27%  |
| 中の下ぐらい  | 47%  | 20%  |
| うしろの方   | 45%  | 19%  |

英語を最も大事な教科だとしている者は、数学の成績が中以下に多いのが目につく。これは数学ができないので、いきおい文系の方に興味、関心、能力が向き、英語を1位にあげるという形となって表れたのであろう。しかし、数学がトップの方では34%が英語を1

位にランクしているものの、数学を1位とする者は40%と、英語を上回っている。

良くできるからその教科を大事だと考えるのか、あるいは、大事だと考えているから良くできるようになるのか。いずれにせよ、成績の良さと、その教科を重要と考える割合との間に、強い関連が見い出される。しかし、そうは言っても、成績の下位層でも、英語や数学の重要性を否定することはできずにいるのは、表からも明らかで、このあたりに英語、数学を基本教科とみる見方が浮かんでいるようと思える。

表II-4 大事と思う教科(英語)×数学の成績

(%)

| 英語を大事と<br>思う順位<br>数学の<br>成績 | 1位   | 2位   | 3位   | 4位  | 5位  | 6位  | 7位  |
|-----------------------------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|
| トップの方                       | 33.6 | 23.7 | 28.3 | 1.3 | 3.9 | 3.3 | 5.9 |
| 4～5番                        | 27.3 | 26.9 | 33.8 | 4.5 | 3.6 | 2.3 | 1.6 |
| 10番ぐらい                      | 36.4 | 20.4 | 31.7 | 4.8 | 2.0 | 1.8 | 2.9 |
| まん中ぐらい                      | 45.0 | 22.3 | 22.4 | 4.3 | 2.8 | 1.4 | 1.8 |
| 中の下ぐらい                      | 46.6 | 21.5 | 21.1 | 3.9 | 2.8 | 1.5 | 2.6 |
| うしろの方                       | 45.2 | 16.6 | 18.4 | 6.2 | 4.2 | 2.4 | 7.0 |

表II-5 大事と思う教科(数学)×数学の成績

(%)

| 数学を大事と<br>思う順位<br>数学の<br>成績 | 1位   | 2位   | 3位   | 4位   | 5位   | 6位  | 7位  |
|-----------------------------|------|------|------|------|------|-----|-----|
| トップの方                       | 39.8 | 22.1 | 8.7  | 8.7  | 15.4 | 1.3 | 4.0 |
| 4～5番                        | 45.1 | 23.9 | 8.0  | 11.0 | 9.3  | 0.7 | 2.0 |
| 10番ぐらい                      | 34.0 | 27.8 | 11.2 | 8.0  | 13.3 | 2.7 | 3.0 |
| まん中ぐらい                      | 27.0 | 26.2 | 16.4 | 11.2 | 13.3 | 2.2 | 3.7 |
| 中の下ぐらい                      | 20.3 | 26.6 | 16.9 | 14.6 | 13.6 | 4.3 | 3.7 |
| うしろの方                       | 19.0 | 27.5 | 13.2 | 12.7 | 11.9 | 6.6 | 9.1 |

## 5. 教科の有用性

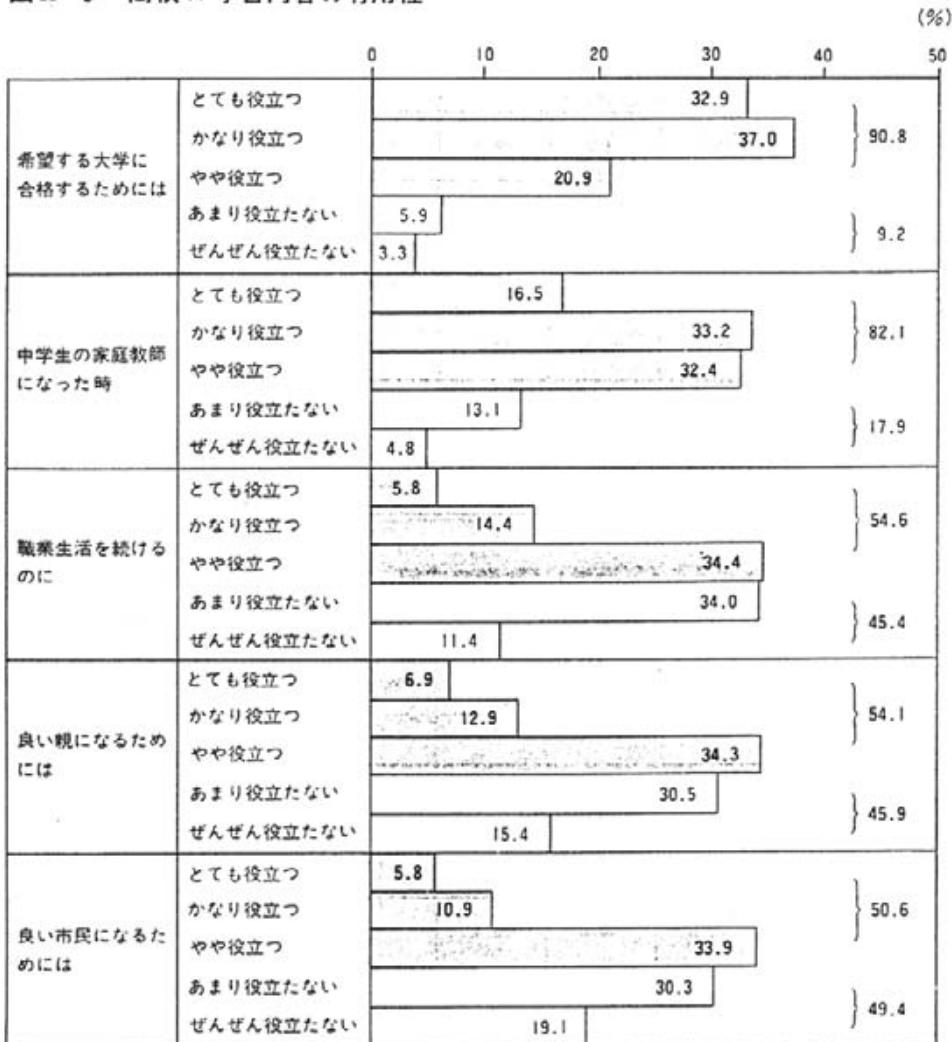
このように生徒たちは、英語、数学を軸にして、毎日の授業に臨んでいる。それでは、生徒たちは高校で学習している内容が、将来の生活にとって、どれくらい役立つと思っているのであろうか。

図II-3に示す通り、やはり、大学入試が第1位を占め、希望する大学に合格するため

に「とても役立つ」が33%で、「とても」「かなり」「やや」役立つ肯定的な答えをした者は91%に及んでいる。つまり、生徒たちは入試を意識し、それをとび越える手段として、教育内容が有用であるというとらえ方をしているらしい。

また、「中学生の家庭教師をする時」に役立

図II-3 高校の学習内容の有用性



つと答えている者も多い。しかし、高校の学習内容は大学への橋渡しと思っているため、教育内容が自分の将来の生活に役立つという認識には至っていない。例えば、「職業生活を続けるのに」「良い親になるために」「良い市民になるために」高校での教育が有用というような広い展望に立つ者は50%をわずかに超えているにすぎない。

正直なところ、われわれおとなにしたところで、職業生活で使用している知識や技術は

高校で習ったもの的一部分で、その他は大学入学とともに忘却している。そうだとすると、生徒たちの考え方を的外れとも言い難くなる。もっとも高校生の場合、将来の進路が未確定なので、どの知識が将来求められるかを確定し難い。そのため、ある程度幅の広い学習が求められるが、それにしても、現在の高校教育は、あまりに幅の広い知識を与えすぎているようにも思える。

表II-6 高校の学習内容が希望する大学に合格するためにはどうか

| 尺度          |                       | (%)    |        |       |          |           |
|-------------|-----------------------|--------|--------|-------|----------|-----------|
| 項目          |                       | とても役立つ | かなり役立つ | やや役立つ | あまり役立たない | ぜんぜん役立たない |
| 高校生活に対する充足感 | とても} 充足している<br>かなり}   | 41.5   | 37.0   | 15.6  | 3.6      | 2.3       |
|             | やや充足している              | 33.1   | 42.4   | 19.1  | 4.2      | 1.2       |
|             | やや充足していない             | 32.0   | 39.2   | 21.8  | 5.3      | 1.7       |
|             | あまり} 充足していない<br>ぜんぜん} | 27.2   | 31.2   | 25.6  | 9.5      | 6.5       |
| 現在校の入学希望の度合 | はじめからぜひ入学したかった        | 39.5   | 39.1   | 16.1  | 3.9      | 1.4       |
|             | はじめからやや入学したかった        | 31.9   | 40.2   | 21.7  | 4.5      | 1.7       |
|             | どちらともいえない             | 28.9   | 36.7   | 24.3  | 6.8      | 3.3       |
|             | はじめはやや入学したくなかった       | 28.6   | 40.3   | 20.7  | 7.9      | 2.5       |
|             | はじめは全く入学したくなかった       | 31.1   | 29.7   | 23.2  | 8.3      | 7.7       |
| 進路希望        | 4年制大学(国公立)            | 41.6   | 38.7   | 14.0  | 3.9      | 1.8       |
|             | 4年制大学(私立)             | 25.9   | 32.5   | 26.9  | 10.2     | 4.5       |
|             | 各種学校・専修学校<br>短期大学     | 22.8   | 41.7   | 27.6  | 5.6      | 2.3       |
|             | 就職・家業・未定              | 28.2   | 35.0   | 25.3  | 5.0      | 6.5       |
| 全 体         |                       | 32.9   | 37.0   | 20.9  | 5.9      | 3.3       |

## 6. 高校生活の充足感

生徒が充足感を持って高校生活を送っているかどうかは、表II-7に示してある。

- |              |     |
|--------------|-----|
| ①とても充足している   | 5%  |
| ②かなり充足している   | 16% |
| ③やや充足している    | 31% |
| ④やや充足していない   | 15% |
| ⑤あまり充足していない  | 19% |
| ⑥ぜんぜん充足していない | 48% |

肯定的な回答がわずかながら、否定的な答えを上回っているが、「ぜんぜん充足していない」者が13%に達していることを考えると、これは明るい数値ではない。

そこで、どんな生徒が高校生活に充足感を味わっているのかを調べてみたのが表II-7のクロス欄である。別の章でもこれに関連した考察を加えているので結果を簡単に要約すると、充足感を持っている生徒はランクの高い学校に通学している者、部活動に熱心に参加している者、また将来高い目標を持っている者が多い。

一方、ぜんぜん充足感が得られない生徒像としては、自分の望まないランクの低い学校にいやいやながら入り、部活動にも参加する気がなく、就職か家業を継ぐか、できれば私立大学ぐらいに行きたいというような、あまり積極的でない生徒像が浮かんでくる。

このうち、ランクの開きは仕がないとしても、将来の進路や部活動などについては、教師サイドから手を打つことも可能であろう。したがって、教師は早い機会に充足感を持てずにいる生徒の発見につとめ、さまざまな励ましを与えて、何とか充足感を持たせて卒業

させてやるよう努力が必要であろう。

そこで充足感をもう少し細かく、高校生が充足感を得られるのはどんな時、どんな場所、どんな場合であろうかを調べようとしたのが、図II-4である。「充足している」と肯定的な答えが半数を超えたのは8項目のうち、3項目にしかすぎない。つまり、友人との交際、また部活動の中での友人たちとのふれ合いの中に、生徒たちは充足感を見い出し、その話題は主として趣味、娯楽に関するものとなる。しかし学習のこと、将来の進路とか人生問題など堅苦しい話題は避けて通っている。

そして、残念ながら学習面での充足感が、半数をやや下回るのは、図中に示す通りである。意欲に燃えている少数の生徒を除くと、授業は生徒たちの心を捉えるのに成功していない。それだけに、

- ①授業を充実させるにはどうしたらよいのか。生徒にとっても教師にとっても良い授業とはどんなものなのか
  - ②生徒にやる気を起こさせる方策はどんなものがあるか。教師側の対応策と共に、生徒の自発性を促すものにどんなものがあるか
  - ③教師側が個性の尊重ということで、他の教師との共同の模索を妨げているものは何か
  - ④予備校とは違う高校の授業の本音と建前をどうマッチさせていくか
  - ⑤生徒に充足感を持たせていくにはどのような方策がよいのか
- などを考えていく必要が感じられてならない。

表II-7 充足感は何によって支えられているか

| 項目          |                   | 尺度   | とても充足している | かなり充足している | やや充足している | やや充足していない | あまり充足していない | ぜんぜん充足していない | (%) |
|-------------|-------------------|------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|-------------|-----|
| ランク別        | A                 | 6.6  | 18.7      | 31.1      | 14.4     | 17.9      | 11.3       |             |     |
|             | B                 | 3.9  | 16.2      | 32.9      | 14.6     | 21.1      | 11.3       |             |     |
|             | C                 | 4.4  | 10.8      | 31.0      | 16.8     | 19.7      | 17.3       |             |     |
| 部活動         | 運動部で熱心に参加している     | 7.7  | 22.6      | 36.3      | 12.5     | 15.4      | 5.5        |             |     |
|             | 文化部で熱心に参加している     | 8.8  | 23.2      | 34.4      | 14.2     | 11.3      | 8.1        |             |     |
|             | 参加しているがあまり熱心でない   | 4.5  | 11.1      | 30.2      | 16.5     | 21.4      | 16.3       |             |     |
|             | 以前入部、現在退部         | 3.5  | 9.9       | 31.2      | 15.3     | 22.8      | 17.3       |             |     |
|             | 参加したことがない         | 2.0  | 10.4      | 23.3      | 20.0     | 23.6      | 20.7       |             |     |
| 現在校の入学希望の度合 | はじめからぜひ入学したかった    | 11.1 | 23.1      | 33.4      | 10.5     | 14.5      | 7.4        |             |     |
|             | はじめからやや入学したかった    | 3.3  | 16.3      | 36.8      | 18.6     | 18.1      | 6.9        |             |     |
|             | どちらともいえない         | 2.5  | 12.4      | 29.1      | 17.2     | 21.9      | 16.9       |             |     |
|             | はじめはやや入学したくなかった   | 3.0  | 12.7      | 35.5      | 16.8     | 22.6      | 9.4        |             |     |
|             | はじめは全く入学したくなかった   | 3.6  | 8.8       | 23.2      | 15.3     | 22.5      | 26.6       |             |     |
| 進路希望        | 4年制大学(国公立)        | 5.6  | 18.0      | 33.6      | 14.4     | 17.5      | 10.9       |             |     |
|             | 4年制大学(私立)         | 5.6  | 14.6      | 28.6      | 14.9     | 20.0      | 16.3       |             |     |
|             | 各種学校・専修学校<br>短期大学 | 3.3  | 12.4      | 33.4      | 18.0     | 24.0      | 8.9        |             |     |
|             | 就職・家業・未定          | 5.9  | 11.9      | 28.0      | 15.9     | 18.8      | 19.5       |             |     |
| 全 体         |                   | 5.3  | 15.4      | 31.4      | 15.2     | 19.3      | 13.4       |             |     |

図II-4 充足感のTPO

|                         | とても<br>充足している | かなり<br>充足している | やや<br>充足している | やや充足<br>していない | あまり<br>充足していない | (%)<br>ぜんぜん<br>充足していない |
|-------------------------|---------------|---------------|--------------|---------------|----------------|------------------------|
| 友人との交際・話し合<br>いの時       | 25.5          | 34.0          | 25.3         | 7.1           | 4.5            | 3.6                    |
| 趣味・娯楽の面で                | 19.2          | 25.0          | 27.8         | 11.6          | 9.3            | 7.1                    |
| 部活動などの面で                | 15.5          | 24.8          | 13.7         | 10.0          | 11.7           | 24.3                   |
| 授業を受けている時               | 22.0          | 24.7          | 19.6         | 17.4          | 13.7           |                        |
| 異性との交際で                 | 7.4           | 18.1          | 13.0         | 13.9          | 39.5           |                        |
| 先生方との関係で                | 5.9           | 20.9          | 20.2         | 24.9          | 25.5           |                        |
| 塾・予備校・補習など<br>で         | 6.8           | 18.9          | 15.3         | 14.8          | 40.6           |                        |
| 生徒会・委員会 ホーム<br>ルーム活動などで | 5.3           | 13.9          | 20.0         | 25.4          | 32.7           |                        |

## 第三章 高校生活への期待と現実



### 1. 入学前の期待

中学生たちは、やがて始まる新しい高校生活にどんなことを、どの程度期待して入学していくのであろうか。そして、現実の学校生活を体験するにつれて、高校に対するはじめのイメージや期待感はどのように変化しているのだろうか。

まず、入学する前の期待は図III-1の通りだが、

1) 入学前の期待感の大きかったものは、

- ① 気の合う友人が増えるだろう………62%
- ② 校則はそれほど厳しくないだろう……48%
- ③ 希望する大学へ進学できるだろう……45%
- ④ 楽しい学校行事がたくさんあるだ

ろう……………44%

の通りである。しかし、過半数の生徒に支持されているのは①の項だけで、②③④への期待は4割強にとどまっている。それに反し、  
2) 期待感の小さかったものは、

- ① 悩み事の相談にのってくれる先生  
が見つかるだろう……………17%
  - ② 文学小説を読める時間ができるだ  
ろう……………18%
  - ③ 恋人ができるだろう……………24%
  - ④ 授業は楽しくなるだろう……………27%
- である。「残念ながら、授業は楽しくないかもしれないし、特別に楽しいことはないかも

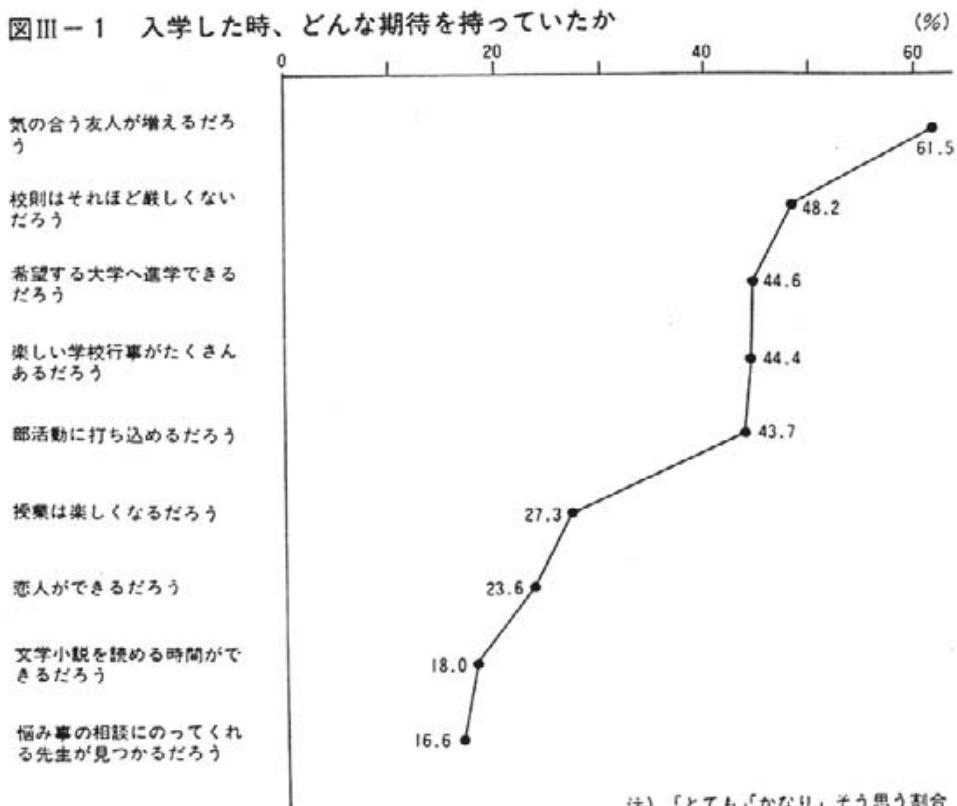
れない。しかし、中学校と比べれば、校則が厳しくないし、友人もできるだろう。したがって、「一応は充実した生活を送れるだろう」というのが入学する前の生徒たちの気持ちである。

普通科の高校の持つ最大公約数的な目的は、大学進学であろう。そこで、「進学」についての回答内容に関して、もう少し掘り下げてみよう。

普通科は、いわゆる進学有名校、あるいは伝統のある地域の名門校（進学率もトップクラスの場合が多い）などを頂点とし、その下の部分を受け入れる中堅クラスのグループ、またその下を受け入れる3番目の高校群のグループと、入学する生徒の学力差により高校間格差がついているのが現状である。こうしたラ

ンク別にした時進学への期待度はどうなっているであろうか。希望している大学への進学可能性を否定した割合が約半数に及んでいるのは、図III-1からも明らかである。しかしこれは、学力試験による選抜という方法、言い換えれば序列順に一列に並んだ生徒たちを、上から順に区切っていくという現在の入試制度では、いやおうなしに自分の学力水準をみつけられ、志望校のランクを下げるという挫折感を味わわざるを得ない。その結果、不本意校ながら、ある学校へ入学する生徒も生じる。こうした場合、生徒にとって、その学校は、もはや希望も持ちにくい仮の場でしかないと映るのだろう（結果は、本人の心構えでかなり変化するのではないか）。こうした背景が、図III-1の中で45%に及ぶ生徒が、

図III-1 入学した時、どんな期待を持っていたか



注) 「とても」「かなり」そう思う割合

進学の見通しが暗いと答えた事情ではないだろうか。この点をランク別（トップグループをA、中堅グループをB、その次のグループをCとする）で見ると表III-1のようだ。

| Aランク       | Bランク        | Cランク |
|------------|-------------|------|
| 「思う」 58%   | > 43% > 29% |      |
| 「思わない」 42% | < 57% < 71% |      |

となり、進学への期待がランク順序となっていることがわかる。同じ普通科といつても進学への期待度にこのような開きが見られるのでAランクの高校では過半数が「進学できるだろう」と希望を持って毎日の学校生活を送っている。しかしCランクの高校では29%の支持に対し、71%もの多くの生徒が否定的であるから、高校生活が、将来に向かって

明るい希望と自信に満ちたものにはとてもなりにくいと思われる。

しかし、こうした傾向は進学についての意識に限られ、表III-1によると、「気の合う友だちができる」「部活動に打ち込める」「悩み事の相談にのる」など仲間との人間関係の面では、いずれもランク間の格差は認めがたい。したがって、入学にあたってAランクかBランクかは、大学進学の見通しに、明暗を与えることはあっても、高校生活そのものについては、ほとんど影響を与えていないように思える。換言するなら、普通高校の場合、進学期待を除けば、どの高校へ入っても、あまり変わりはないのかもしれない。

表III-1 入学した時の期待×学校ランク別

| とても・かなりそう思う |      |      | 項目                      | あまり・ぜんぜん<br>そう思わない |      |      | (%) |   |   |
|-------------|------|------|-------------------------|--------------------|------|------|-----|---|---|
| ランク別        |      |      | A                       | B                  | C    | ランク別 | A   | B | C |
| A           | B    | C    |                         |                    |      |      |     |   |   |
| 61.4        | 66.0 | 58.7 | 気の合う友人が増えるだろう           | 38.6               | 34.0 | 41.3 |     |   |   |
| 47.4        | 41.6 | 40.4 | 部活動に打ち込めるだろう            | 52.6               | 58.4 | 59.6 |     |   |   |
| 47.2        | 47.5 | 38.8 | 楽しい学校行事がたくさんあるだろう       | 52.8               | 52.5 | 61.2 |     |   |   |
| 30.1        | 23.0 | 26.4 | 授業は楽しくなるだろう             | 69.9               | 77.0 | 73.6 |     |   |   |
| 21.7        | 29.9 | 21.9 | 恋人ができるだろう               | 78.3               | 70.1 | 78.1 |     |   |   |
| 22.6        | 16.1 | 13.9 | 文学小説を読める時間ができるだろう       | 77.4               | 83.9 | 86.1 |     |   |   |
| 57.9        | 42.7 | 29.1 | 希望する大学へ進学できるだろう         | 42.1               | 57.3 | 70.9 |     |   |   |
| 17.2        | 13.4 | 17.7 | 悩み事の相談にのってくれる先生が見つかるだろう | 82.8               | 86.6 | 82.3 |     |   |   |
| 51.2        | 56.1 | 39.3 | 校則はそれほど厳しくないだろう         | 48.8               | 43.9 | 60.7 |     |   |   |

## 2. 入学後の変化

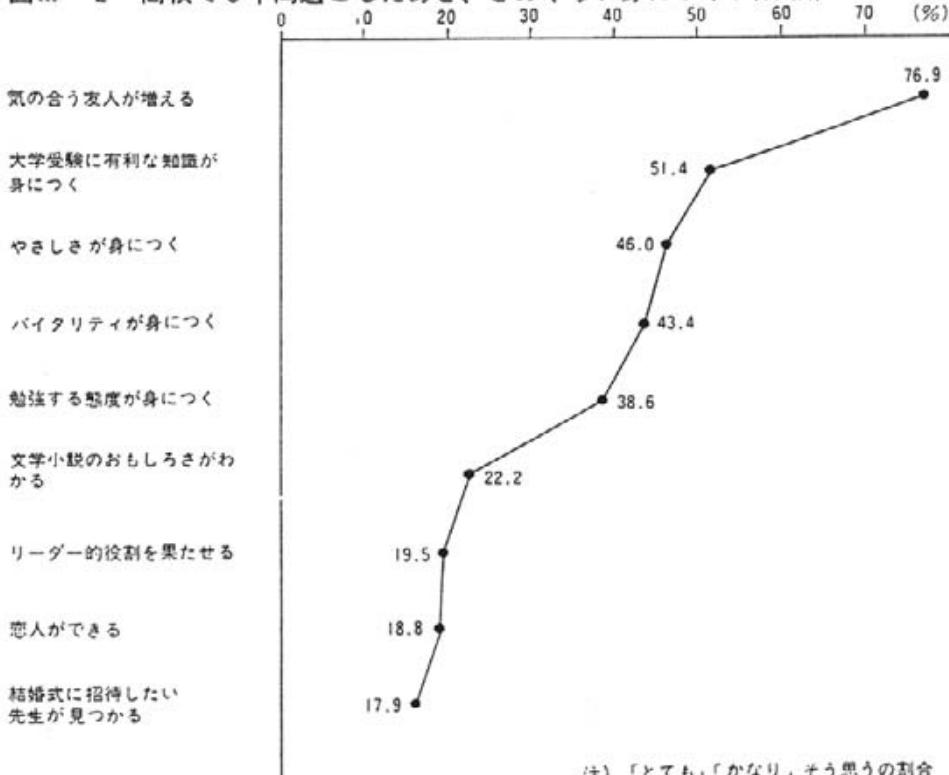
それでは、高校生活を体験してから、生徒たちの気持ちはどう変化したのだろうか。

図III-2に示したように

- 1) 「身につく」とした割合の多いものは、  
①気の合う友人が増える……………77%  
②大学受験に有利な力がつく……………51%  
③他人の気持ちを考える心のやさ  
しさが身につく……………46%  
であり反面、  
2) 「身につく」とした割合の少ないものは、  
①結婚式に招待したい先生が見つか  
る……………18%  
②恋人ができる……………19%  
③リーダー的役割が果たせるよう

なる……………20%  
で、割合の多いもの、少ないもののベスト3  
を選んでみると上記の通りになる。ここに数  
字は、1年生にとっては、約6~7か月の体  
験、2年生以上はそれぞれ、約2年、3年の  
体験の結果得たものであると考えられる。特  
に3年生については3年間の学校生活をふり  
返っての「まとめ」にもなろう。調査をして  
意外だったことは、生活体験が進むにつれて  
ものの考え方、見方は変化しているはずなのに、  
この調査結果からはどの項目も学年による差  
が見い出せなかつたことであった。強いて言  
えば3年生が全般の項目についてやや否定的  
な数字が増加したとはいうものの、学年によ

図III-2 高校で3年間過ごしたあと、どのくらい身につくか(体験)



注) 「とても」「かなり」そう思うの割合

る変化はないものに等しい。

しかし、図III-2へ戻ると、生徒たちが生活を体験していく中で、普通科高校では、「大学受験に有利な学力が身につく」「勉強する態度が身につく」など、普通科高校本来の目的にある程度の支持が集まつたのは（数字の上では不本意な値だが）ますますという印象を受ける。しかし、「勉強する態度が身につく」が39%では淋しいだけでなく、将来の進学実現も危ぶまれる数値である。それと同時に、「気の合う友人が増える」は望ましい傾向であるにせよ、「結婚式に招待したい先生が見つかる」が18%にとどまつたのは、学校のあり方としては問題が残ろう。

なお、表III-2に、入学後の変化をランクごとに集計した結果を示したが、ランクによる開きが認められたのは、「大学受験に有利な知識が身につく」と「勉強する態度が身につく」などの学習面に限られ、その他の面ではラン

ク差を見い出しえなかつた。

つまり、入学前と同じように、入学してからも、表III-1の進学そして、学力などの面でランク差は存在するものの、その他の面では予想通りというべきなのか、学校のランク差は、高校生活にさほど大きな影響を与えていないようと思える。

しかし、いずれにせよ、図III-1と図III-2を対照して見れば明らかなように、「入学前」と「入学後」とで相変わらず支持の高いものは「気の合う友人が増える」項目である。学生生活の中で友だちは人間形成に大きくかかわりその後の進路選択にも影響を与えるのであろう。それだけに、友人を見い出せたという反応は、現在高校生活を考える時の明るい材料と言えよう。

なお、図III-3によると、「あなたの学校の特色は」の問いに、生徒たちは、「受験指導や進学指導に力を入れている」と答えており、

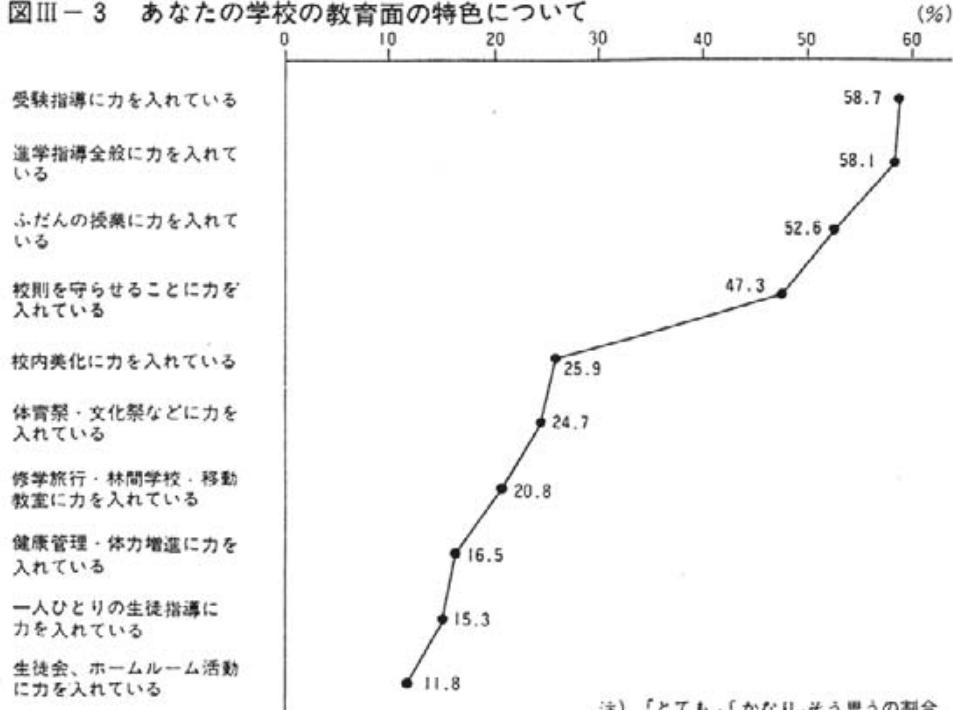
表III-2 入学してからの体験×学校ランク別

| とても・かなりそう思う |      |      | 項目               | あまり・ぜんぜんそう思わない |      |      |  |
|-------------|------|------|------------------|----------------|------|------|--|
| ランク別        |      |      |                  | ランク別           |      |      |  |
| A           | B    | C    |                  | A              | B    | C    |  |
| 77.4        | 76.2 | 76.5 | 気の合う友人が増える       | 22.6           | 23.8 | 23.5 |  |
| 15.7        | 20.7 | 21.5 | 恋人ができる           | 84.3           | 79.3 | 78.5 |  |
| 45.7        | 33.7 | 33.2 | 勉強する態度が身につく      | 54.3           | 66.3 | 66.8 |  |
| 46.4        | 37.9 | 43.1 | バイタリティが身につく      | 53.6           | 62.1 | 56.9 |  |
| 64.9        | 47.7 | 37.0 | 大学受験に有利な知識が身につく  | 35.1           | 52.3 | 53.0 |  |
| 25.0        | 20.4 | 19.9 | 文学・小説のおもしろさがわかる  | 75.0           | 79.6 | 80.1 |  |
| 20.9        | 17.0 | 19.4 | リーダー的役割を果たせる     | 79.1           | 83.0 | 80.6 |  |
| 19.2        | 13.5 | 19.0 | 結婚式に招待したい先生が見つかる | 80.8           | 86.5 | 81.0 |  |
| 44.7        | 45.8 | 47.6 | やさしさが身につく        | 55.3           | 54.2 | 52.4 |  |

特にそうした傾向は、Aランクの高校に顕著である（表III-3）。このように見てみると、大づかみにして、社会的な評価やランク、学校としての特色は、受験指導や進学指導を中心

になされているが、友人ができるなどの高校生活については、高校間格差は少ないようと考えられる。

図III-3 あなたの学校の教育面の特色について



表III-3 学校の特色×学校ランク別

| とても・かなりそう思う |      |      | 項目                     | あまり・ぜんぜんそう思わない |      |      |  |
|-------------|------|------|------------------------|----------------|------|------|--|
| ランク別        |      |      |                        | ランク別           |      |      |  |
| A           | B    | C    |                        | A              | B    | C    |  |
| 68.9        | 56.8 | 47.4 | 受験指導に力を入れている           | 14.1           | 17.4 | 23.6 |  |
| 59.4        | 56.8 | 57.4 | 進路指導全般に力を入れている         | 16.8           | 16.1 | 17.6 |  |
| 62.2        | 52.7 | 40.5 | ふだんの授業に力を入れている         | 10.3           | 13.3 | 18.3 |  |
| 13.7        | 12.5 | 19.0 | 一人ひとりの生徒指導に力を入れている     | 48.6           | 48.4 | 43.8 |  |
| 34.5        | 43.7 | 65.7 | 校則を守らせることに力を入れている      | 42.5           | 29.2 | 15.1 |  |
| 31.5        | 17.8 | 20.7 | 体育祭・文化祭などに力を入れている      | 42.3           | 49.9 | 45.2 |  |
| 11.6        | 11.1 | 12.5 | 生徒会・ホームルーム活動に力を入れている   | 55.7           | 52.4 | 50.2 |  |
| 19.7        | 19.2 | 23.3 | 修学旅行・林間学校・移動教室に力を入れている | 49.5           | 47.5 | 44.7 |  |
| 16.2        | 10.7 | 20.5 | 健康管理・体力増進に力を入れている      | 52.4           | 52.5 | 46.4 |  |
| 25.2        | 13.3 | 34.8 | 校内美化に力を入れている           | 49.2           | 51.6 | 42.6 |  |

### 3. 学校に対する誇り

今まで入学してから現在に至るまでの生徒たちの心の動きを凝視してきた。そこで改めて、現在の学校についての気持ちを、学校に対する誇りの観点から捉え直してみたい。

生徒たちが、入学してからの学校生活体験をしてきた現在、母校の有様を自分とのかかわりの中でどう捉えているのであろうか。親の目から見れば、あるいは受け入れ側である教師の立場からすれば、「入学したからには、過去は過去として潔く切り捨て、進学先の高校の持つ新しい環境の中で次のポイントを目指し出発するであろう」と予想し、またそうあってほしいと願っている。しかし、現実には、残念ながら誰もが母校に誇りを持って学校生活を送っているわけではない。「誇り」を愛校心の表れと解釈した時、どのような生徒が誇りを持っているのだろうか。われわれ教師としては、自分の高校に在学している生徒たちすべてが、母校に誇りを持っていたらと切望したい。そうなれば、学校全体の雰囲気がどんなにかよくなるだろうと思う。

さて、本調査ではこの点について集計した結果、表III-4のように「とても」「かなり」「やや」誇りを持っている者は43%で、「やや」

「かなり」「ぜんぜん」誇りを持っていない者は21%と「持っている」グループは「持っていない」グループの約2倍の値を示している。

しかし、この数値は、学校に、「とても」「かなり」誇りを持つ生徒が2割にとどまっているに注目すべきであって、やはり全体として見ると、生徒たちの学校に対する愛着心は必ずしも高いと言い難い。特にいわゆるランクの低い高校ほど、愛着心が低いのが目につく。

しかし、図III-4のように、Aランクの高校へ入学した生徒は、はじめから入りたくて入学してきた者が多く、それに反し、Cランクの高校では、心ならずも入学してきた生徒が5割に迫っている。

したがって、ランクそのものよりも、その学校へ入学したかったかどうかが、その後の生徒たちの意識に大きくかかわってくるようと考えられるが、結果は図III-5、図III-6に示す通りである。つまり、

- |          |   |                |
|----------|---|----------------|
| ①はじめから入学 | { | 誇りを持つ : 526人   |
| したかった    |   |                |
| ②はじめから入学 | { | 誇りを持てない : 168人 |
| したかった    |   |                |

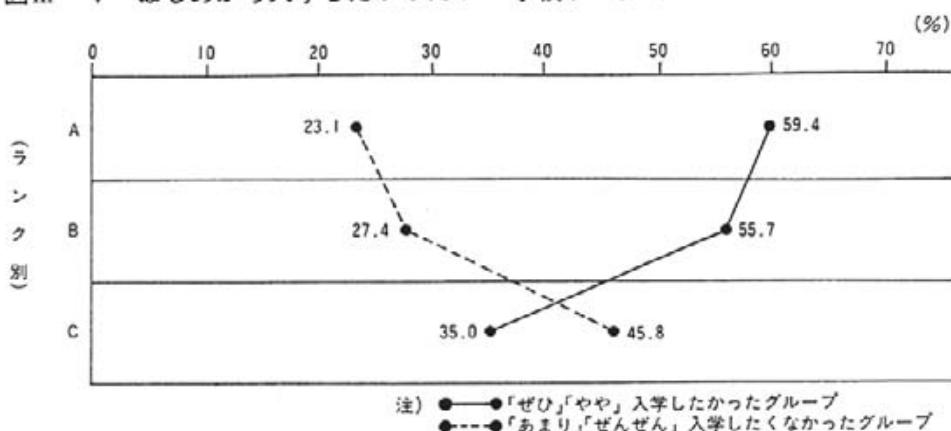
表III-4 学校に対する誇り

| 調査区分<br>尺度    | 単純集計 (%) | ランク別 |      |      | 学年別  |      |      | 性別   |      |
|---------------|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|               |          | A    | B    | C    | 1年   | 2年   | 3年   | 男子   | 女子   |
| とても誇りを持っている   | 10.1     | 22.2 | 29.5 | 17.6 | 16.3 | 25.6 | 19.2 | 21.8 | 22.6 |
| かなり誇りを持っている   | 12.1     | 42.9 |      |      |      |      |      |      | 21.8 |
| やや誇りを持っている    | 20.7     |      | 23.2 | 22.3 | 16.6 |      |      |      |      |
| なんともいえない      | 36.0     | 30.1 | 40.2 | 40.2 | 34.8 | 38.2 | 34.6 | 34.8 | 38.3 |
| やや誇りを持っていない   | 2.8      |      | 2.1  | 3.8  | 3.1  |      |      |      |      |
| かなり誇りを持っていない  | 6.8      | 18.3 | 21.1 | 15.1 | 16.1 | 23.8 | 15.7 | 19.2 | 20.3 |
| ぜんぜん誇りを持っていない | 11.5     |      |      |      |      |      |      | 21.4 | 14.2 |

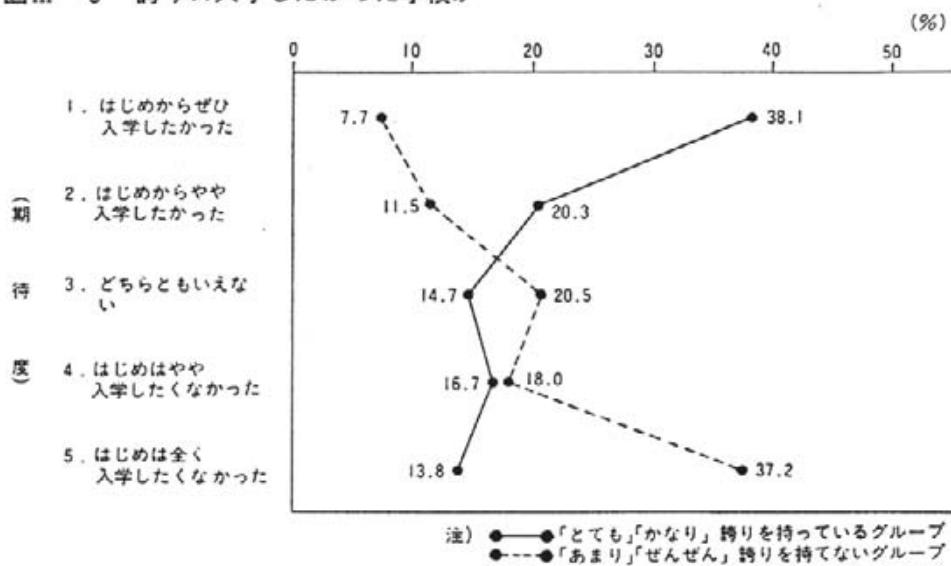
- ③はじめは入学  
 したくなかった    { 誇りを持つ : 165人  
 ④はじめは入学  
 したくなかった    { 誇りを持て  
 ない : 346人  
 の通り、はじめから入学したかった高校に入  
 った生徒(694人)の75% (526人)は、入学した

くなかった生徒(511人)のうち、入学後学校  
 に誇りを持てた者は32% (165人)にすぎな  
 い。  
 それだけに、望み通りの高校へ入れること  
 が、生徒たちにとって重要なのであろうが、  
 しかし、そうした反面、図III-7、図III-8、

図III-4 はじめから入学したかったか×学校ランク別



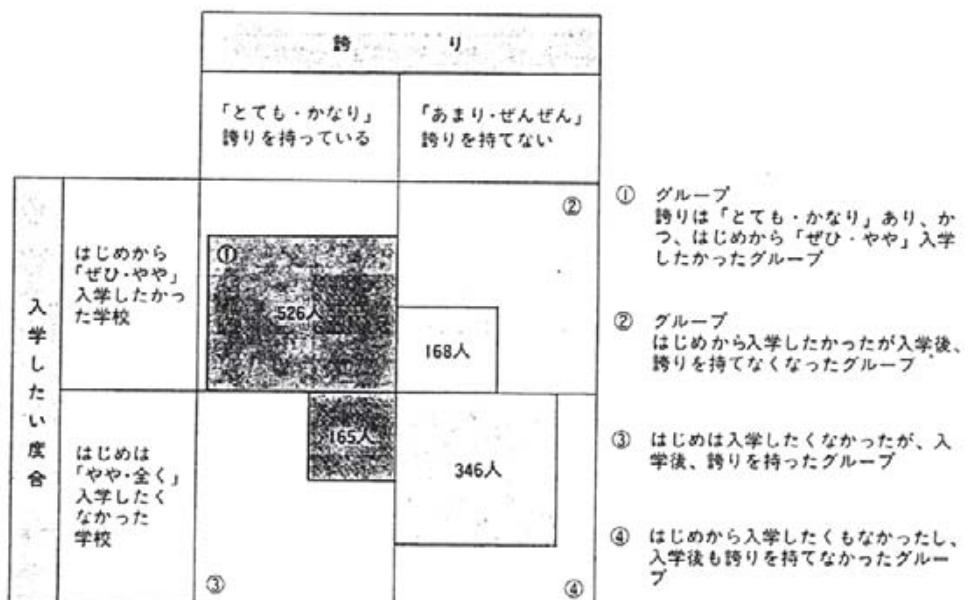
図III-5 誇り×入学したかった学校か



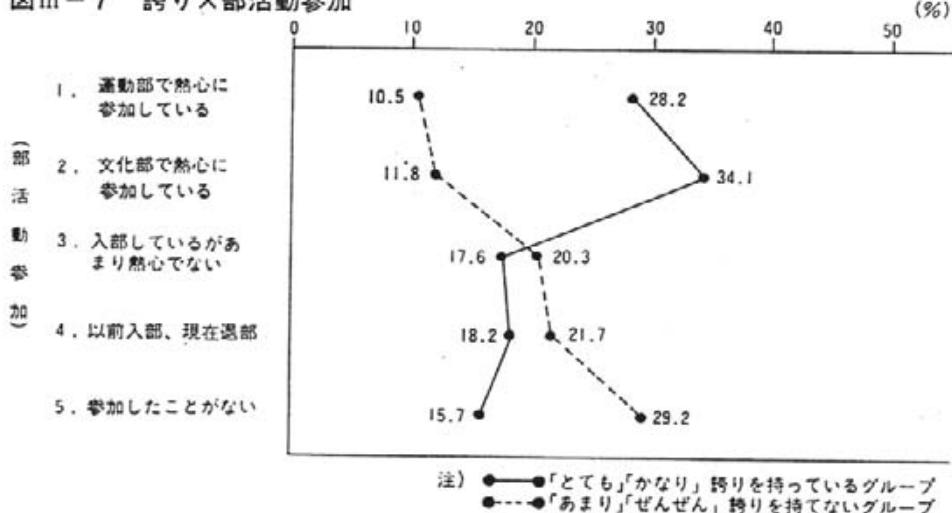
図III-9から明らかなように、入学前の気持ちはどうあれ、入学後、熱心に部活動に加わったり、高校生活で充足感を味わうことができれば、学校に愛着心を持てるのも、事実のように思われる。したがって、入学する前の意識が入学後に尾を引くのは否定し難いが、学

校生活を魅力あるものに変えていけば、学校に愛着心を持つてゐるのも確かであろう。そうした意味では、学校の在り方が問われているのかもしれない。

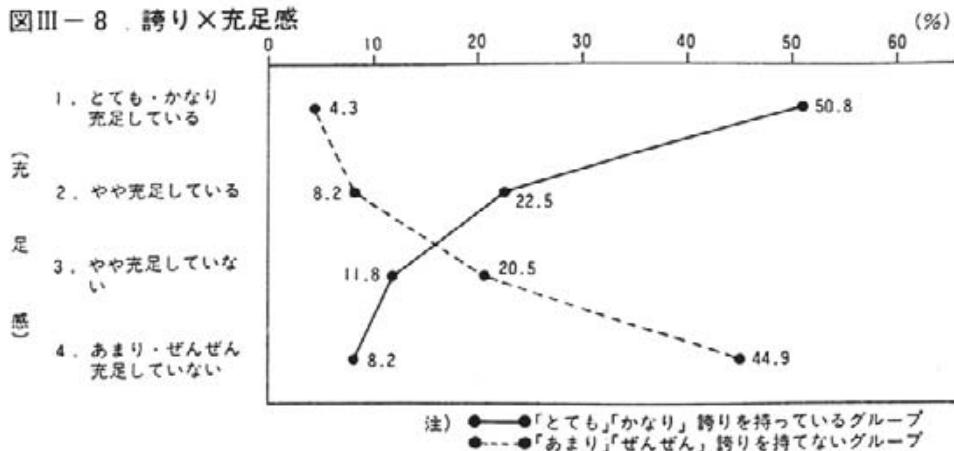
図III-6 誇り×入学したかった学校か



図III-7 誇り×部活動参加



図III-8 誇り×充足感



図III-9 あなたは今の高校の生徒であることに誇りを持っていますか (%)

